
曇り空の向こう

上原直也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇り空に向こう

【Zコード】

N4772F

【作者名】

上原直也

【あらすじ】

池田正行という二十八歳の青年の、とある日常や、想いを綴った小説です。

第一話

川島優貴がその言葉を口にしたのは、映画を観終わって、映画館近くにあるレストランで食事をしていくときだった。

「わたしたち別れたほうがいいと思わへん？」

川島優貴は俯き加減に言った。

池田正行は彼女の言葉があまりにも唐突だったので、口に運びかけていたお冷のグラスを思わず取り落としそうになった。

池田正行が咄嗟のことに上手くリアクションできずにいると、「わたくしたち別れたほうがいいと思うねん」

と、優貴はさつきと同じ科白を繰り返して言った。

「こきなりやな

と、池田は動搖して言った。

「なんでなん？」

と、池田は尋ねてみた。それから、手にしているお冷のグラスをそつと慎重にテーブルの上に戻す。万が一落として割つてしまいでもしたら、自分たちの関係は完全に終わってしまうような気が、池田はした。

池田の思い出せる限り、自分たちが別れなければならない理由はどこにも見当たらぬように思えた。浮氣もしていないし、喧嘩もしていない。

「なんか俺に悪いところがあるんやつたら直すしな」

池田は優貴のことが好きだった。だから、別れたくはなかった。

「べつに池田ちゃんに悪いところがあるわけじゃないねん」と、優貴は眼差しを伏せたまま申し訳なそうな口調で言った。

「じゃあ、なんでなん?」

池田としては別れなければならぬ理由が知りたかった。

優貴はテーブルのうえのお冷を手に取つて一口口呑んだ。それから、手にしていたお冷のグラスをテーブルのうえに戻すと、食べ終えたばかりの料理の皿のうえに眼差しを落とした。そうして少しのあいだそのままでいたあと、彼女は意を決したように顔を開けで池田の顔を見ると、

「べつになつきとした理由があるわけじゃないねん」と、言った。

「でも、なんかな、最近自分の気持ちがよくわからへんくてな」と、優貴は言葉を続けた。そう言った彼女の声は泣き出しそうに

微かに震えた。泣きたいのは自分の方だと池田は思ったが、口に出して何も言わなかつた。

「だから、ちよつとのあいだ距離をおきたいねん。自分の気持ちを整理する時間が欲しい」

池田としてはそう言われてしまつと頷くことしかできなかつた。池田にできることがあるとすれば、そうして距離をおいているあいだに、彼女の気持ちがいい方向に変わってくれることを願うことだけだつた。

レストランを出たあと、池田はいつも通り車で優貴を彼女の家まで送つていたが、その車のなかでの彼女の表情はどこか思いつめた様子で、これはもうほんとうにダメかもしれないな、と、池田は諦めるように思つた。

池田は一人暮らしをしている自分の部屋でソファーにうえに仰向けになつて横になりながら、今日一日の出来事を思い返していた。

最近は仕事が忙しくて、このところは優貴とは会えない日が続いていた。今日のデートも一ヶ月ぶりくらいのことだった。優貴が別れたいと口にしたのは、もしかしたらそのことが原因なのかなと池田は想像したが、しかし、それにしては今日デートをしているときの彼女の表情は楽しそうだった、と、一方で府に落ちなかつた。

今日、最後に、映画を見終わつたあと、あのレストランで食事をするときまでは全てが順調にいつているように池田には思えた。来月は彼女の誕生日だし、そのことの話もじょりと池田は考えていた。

それなのに、何故あそこであんな展開になつてしまつたのだろう、と、池田は不可解だつた。もし自分に対してもか不満があるのなら、どうして彼女は今日最初に会つたときにそのことを口にしなかつたのだろう。どうして別れたいと思つてゐる人間と過ごすときに、あんな楽しそうな表情をすることができるのだろう。

池田は考えれば考えるほど理解できなかつた。

池田が川島優貴に出会つたのは、今から三年前だ。知り合ひのコンパに参加したときだ。出会い方としては「ぐく平凡だが、それでも池田はこれまでに付き合つてきただの女性よりも真剣に優貴のことが好きだつた。

三年も関係が続いたのは、池田にとつてはじめての経験だった。いつもはどんなに頑張っても一年が限界だった。それも決まって池田の気持ちが冷めてしまう。池田はもしかしたら自分は飽きっぽい性格なのかなと心配していたのだが、でも、優貴と付き合つてみてそうではないことがわかった。池田は優貴と付き合つはじめてから一度も気持ちが冷めたことはなかつた。やつとほんとうに好きなひとと巡り合つことができた、と、池田は思つていた。

それなのにこんな結果になつてしまつなんて。でも、現実なんて所詮そんなものかもしれない、と池田は自分自身に言い聞かせるようになつた。やつとほんものに出会えたと思つた瞬間、それはすぐになつれてしまつのだ。

第一話

「池田さん、会社終わったあと、ちょっと時間あります? ちょっと相談に乗ってもらいたいことがあるんですけど……」

そう遠慮がちに声をかけられたのは、池田が会社の給湯室で自分のぶんのコーヒーをいれていたときだった。

池田が手にしていたコーヒーカップを手に持つたまま、背後を振り返ると、そこには中島真由がどこか屈心地悪そうな表情を浮かべて立っていた。

「こいつの間にそこにおつたん?」

と、池田は中島真由に笑いかけて言った。

「さっき、池田さんが給湯室に入つてするのが見えたから、急いできたんですね」

と、中島はこくらかざりげなく口元を笑みの形に変えて言った。

中島真由は、池田よりも四つ年下で、今年一十四歳になる。中島真由が池田の勤めてくる会社に入社してきたのは一年前のことだ。

中島はどういうわけか、池田のことを慕ってくれていた。お互い洋楽を聴くのが好きで趣味が合つところのがその理由のひとつかもしれないが、池田は後輩に慕われて悪い気はしなかつた。それに単純に、中島は可愛かった。

他の会社の同僚にも可愛いひとやきれいなひとはいるのだが、そのなかでも群を抜いている、と、池田は思っていた。というか、もつとはつきり言ってしまえば、中島は池田の好みのタイプだった。

その色が白くて華奢な感じや、林檎色のふっくらとした頬の感じや、明るい表情は、池田に昔好きだったひとのことを思い出させた。

池田は彼女の顔を見ると、いつも高校生のときに好きだったひとのことを思い出すことになつた。もし優貴と付き合つていなかつたから、自分は彼女のこと好きになつていたかも知れないな、と、池田はたまに思うことがあつた。

「相談つて、仕事のこと?」

「池田が怪訝に思つて尋ねてみると、

「仕事のことといえば仕事のことなんですからけど……」

と、中島はそれまで浮かべていた笑顔を打ち消して、いくらか歯切れの悪い口調で答えた。その中島の様子からして、会社のなかではあまり話したくないことなのだろうな、と、池田は見当をつけた。

池田は自分の腕時計に視線を走らせる

「今日、ちょっと残業せなあかんくて帰るの九時くらいになるかもしれへんけど、それで良かつたら大丈夫やで」

と、池田は答えた。

中島は池田の返答に軽く頷くと、わかりました、と、答えた。それから、わたしどこか会社の近くで時間潰しますね、と、中島は続けると、池田に向かって軽く会釈をして、そのまま給湯室から去つていった。

池田は片手にコーヒーカップを持ったまま、去つていく中島のどこか思いつめたよつた後姿をぼんやりと見送つた。

池田は仕事が片付くと、中島に今仕事が終わつた旨をメールで送つた。すると、電話がかかってきて、会社近くのカフェで待つていることを彼女は伝えてきた。

池田は会社を出ると、すぐにそのカフェに向かつた。

池田がアイスコーヒーを買つて店内に入つていくと、すぐに後ろから「池田さんいらっしゃ」と、声が聞こえた。振り返つてみると、中島が奥のソファーア席に座つて池田に向かつて片手を上げてするのが見えた。池田は彼女の姿を認めると、彼女が座つているソファーア席まで歩いていって、彼女と向かい合わせに腰かけた。それから、プラスチックの容器に入っているアイスコーヒーの蓋を開けて、ガムシロップとミルクをひとつずついれてストローでかき混ぜる。

「今、仕事終わつたんですか？」

池田がストローでアイスコーヒーを一口口に含むのと同時に、中島が尋ねてきた。池田は正面に座つている中島の顔に視線を向けると、頷いた。

「大変ですね」

と、感想を述べる中島に対し、池田は微笑すると、

「いや、今日はまだそういうで」

と、答えた。

「もつとひどいときは終電なくなつてからタクシーで帰ることもあるしな」

「やつぱり経験が増えると、そのぶん任せられる仕事も多くなつて、大変なんですね」

と、中島は池田の科白に少し不安そうな表情を浮かべて言った。「いや、でも、そんないつも残業してゐわけじゃないしな」

と、池田は彼女を安心させるように微笑みかけて言った。

「今日はたまたまやで。俺もいつもはだいたい中島さんと同じくらいに帰つてゐるで。残業してほんとに遅くなるのは月に二三回くらいのものんやで」

「そつか

と、中島は池田の返事を聞いて安心したのかしていないのか、曖昧に頷くと、机のうえにおいてあるアイスティーを手にとつて一口飲んだ。つられるように池田もアイスコーヒーを飲んだ。

「それで、俺に相談したいことつてなんなん?」

と、池田は手にしていたアイスコーヒーのカップをテーブルのうえに戻すと、冗談めかして明るい口調で言った。

「もしかして会社のなかに好きなひとがおるとか?」

池田の問いかけに、中島は沈んだ表情で短く首を振った。それから、中島は迷うように一度眼差しを伏せてから、再び顔をあげて池田の顔を見ると、

「池田さん、大島主任のことどう思います?」

と、どこか思いつめたような口調で中島は言った。

「大島主任?」

と、池田は中島の質問の趣旨がわからなくて繰り返して言った。

「大島主任がどうかしたん?」

と、池田は尋ねてみた。池田は正直言つて主任のことがあまり好きではなかつた。主任は池田が何かひとつミスをすると、いつまでもそれをネチネチと冗談にして嫌味を言つてくるし、自分は大して仕事はしないくせに、あれができるといないこれができないというさういふのだ。でも、それは個人的なことなので池田は黙つていた。

「・・・なんか最近ひどいんですね」

と、中島は池田の問いかけに少し躊躇つてから口を開いた。

「ひどいって？」

と、池田が話しの続きを促すと、

「なんかセクハラみたいなの」

と、中島は俯き加減に短く答えた。

池田が中島の意外な言葉に戸惑つていると、

「最初は言葉で言つてくるくらいでそんなに大したことなかつたんですけど」

と、中島は続けて説明した。

「でも、最近は露骨に身体とか触つてきて、それでわたしが抗議しても、ただ笑つてるだけで、全然聞いてくれる感じじゃなくて」

池田は中島の告白を聞いていて、主任が自分の知らないところでそんなことをしていたのかと腹が立つた。前々から人間として尊敬できないひとだなとは思つていたが、やっぱりそういうひとだったのか、と、池田は改めて嫌になつた。

「それは最低やな」

と、池田は呆れて言つた。

「ほかのひとにもそんなことしてるん?..」

と、池田が気になつて尋ねてみると、

「みんなも同じかどうかはわからないんですけど、でも、わたしと仲のいいかなちゃんとはやっぱりそういうあるみたいですね」と、中島は同僚の女の子の名前を挙げた。

「それ、部長とかに相談したらいいんぢやう?..」

と、池田は本気で腹が立つて言つた。

「部長とかに言つたらなんとかしてくれるやう?」

「でも、あのひと、主任、上のひとと結構仲良いじゃないですか?だから、わたしなんかが何か言つても、真剣に聞いてもらえないような気がして」

「なるほどなあ

と、池田は中島の話に頷いた。確かにそういうことはあるかもしないな、と池田は思った。主任は部長や総務と仲が良い。そもそも池田の働いている会社は主任の親族が経営している会社だ。だから、たとえ彼女が相談しても、主任が適当に言い訳して誤魔化されてしまう可能性はあった。

「それに

と、中島は池田が黙つていると言葉を続けた。

「もう、なんか主任みたいなひとがいるところで働きたくないんですね」

と、中島はポツリと言つた。

「そつか

と、池田は中島の言葉にたた頷くことしかできなかつた。

「中島さん、結構仕事頑張つてたのに残念やな

と、池田は小さな声で言つた。

池田の知つている限り、中島は会社のほかの誰よりも一生懸命に仕事に取り組んでいる印象があつた。池田は彼女の仕事に対する前向きな姿勢に密かに感心していたのだ。そんな彼女の前向きな意志や、頑張りが、ひとりの人間の自分本位な行動によつて無為に潰されてしまふのだと思つたと、池田は悔しかつたし、憤りを覚えずにはいられなかつた。

「やつぱりダメもとで部長とか社長に相談してみたら？」

と、池田は少しの沈黙のあとで言った。

「中島さんは何も悪くないのに、主任のせいに辞めるなんて悔しくない？」

そう言つた池田の科由に、中島は顔を俯けたまま何秒間のあいだ黙つていたけれど、

「それはわたしも思つたんですけどね」

と、やがて中島は口を開くと言つた。

「でも、たとえそつやつて部長とかに報告して、主任が注意されたとしても、そのあとも主任とは一緒に仕事していくことになるわけじゃないですか？そしたら、気まずいし、嫌だなつて思つて。こんなことで会社辞めるなんてほんと悔しいんですけどね、でも、やっぱりなつて思つて・・・」

「そつか」

と、池田は中島の話に頷いた。池田は彼女のために何かしてあげたいと思つたが、何をどうしたら良いのかわからなかつた。咄嗟に池田が思いついたのは、主任の顔を思いつきり殴つてやることだつたが、そんなことをしても何の解決にもならないことはわかりきつていた。

「なんか今日は話を聞いて頂いてありがとうございました」

と、しばらくの沈黙のあとで、中島は顔をあげると、少し無理に微笑んで言った。

「こんなこと池田さんに話してもしようがないし、すこく個人的なことで申し訳ないんですけど、でも、なんか誰かに話さないと自分の心に上手く整理がつけられそうになくて」

「いや、そんな気にせんでもいいで」

と、池田は微笑んで答えた。

「俺のほうこそ、何も力になつてあげられへんくんていめんな」

と、池田は謝った。

「へへん。池田さんに話してちょっとすつきりした。残業で疲れて

るのに、つき合わせちゃつてごめんなさい」

中嶋はざいが哀しそうな笑顔で言つた。

池田は中島の話を聞いて以来、ますます主任のことが嫌いになつていった。主任が池田に対して嫌味や小言を言つたびに、池田は中島の話を持ち出して、彼を断罪したいような衝動に駆られた。

でも、そうしなかつたのは、保身のことを考えてだつた。あからさまに主任と対立すれば、そのあと会社で働きづらくなつてしまつだろう。下手をすれば辞めなければならなくなるかもしれない。

保身のことを考えて行動を起こさないというのも情けなかつたが、しかし、生活していくためにはお金が必要だし、そのお金を得るために今は今の会社を辞めるわけにはいかなかつた。貯金もほとんどない。

あるいは今の会社を辞めて転職するといつ手もなくはないだろうが、しかし、池田は今の仕事にやつとなれてきたところだつたし、それに第一、主任のためにどうして自分が会社を辞めなければならないんだという気がした。辞めるべきなのは主任の方じやないのか。いないだろうと池田は思った。

また中島のことを考えると、いま主任のセクハラの問題を取り上げるのは得策ではないよつた気がした。中島が裁判を起しても主任と争う覚悟があるならべつだが、たぶん中島はそこまでは考えていないだろうと池田は思った。

いま主任のセクハラの問題を追及すれば、おのずと中島に好奇の視線が注がれることになる。そのことで中島が変に注目をあびたり、

傷ついたりするのが池田は心配だつた。

もし、どうしても主任のことが我慢できなくて、本格的に主任と争うとしても、それは中島に迷惑がかからないよう、彼女が会社をやめてからじょと池田は思った。

5

いつも通り毎日は慌ただしく過ぎていき、やがて週末がやつてきた。

いつもは心持にしているはずの週末も、今回はあまり心が弾まなかつた。といつのも、何も予定がないからだ。池田は週末いつも優貴と過ごす時間に宛てていた。でも、先週あんなことになつてしまつた以上、今週はひとりで時間を潰すしかなかつた。

池田はあの日から一度も優貴とは連絡を取つていなかつた。メールも電話もしてない。もちろん、優貴からの連絡もなかつた。

池田はケータイの着信履歴を見て、落ち込まずにはいられなかつた。上手くいけば、この一週間のあいだに彼女の気持ちが良い方向に変わるんじやないかと池田は期待していのだ。でも、そういうことにほならなかつたらしい。

池田は迷つてから優貴にメールを送ることにした。自分が真剣に優貴のことを想つていてる。もし自分に悪いところがあるのなら、

でれるかせつなおそつと思つてゐる」。

しかし、池田が送つたそのメールに対して、返事が帰つてくれるとはなかつた。

池田は優貴にメールを送つてから、返事が気になつてずっと部屋で待機していたのだが、朝に送つたメールの返事は、昼が過ぎ、夕方が過ぎても、帰つてこないままだつた。

池田はもしかしたら彼女は仕事が忙しいのかもと良い方向に考えてみたが、優貴は派遣社員で土日は完全に休みのはずだつたから、仕事が忙しくてメールを返す暇がないところは考えにくいくことだつた。

もちろん、何らかの事情があつて休日出勤しているといつ可能性はあつたし、他にもメールを返せない事情はいくらでも思いつくことはできたが（たとえばケーキタイを紛失したとか）でも、なんとなくそういうような予感が池田はした。

優貴は意図的にメールを無視しているのだと池田は感じた。そう考へると、池田は我ながら女々しい男だなと思いながらも、気持ちが沈んでしまうのをどうすることもできなかつた。

池田は部屋に歸ると、どうしても優貴からのメールが気になってしまつので、もづ夜の八時を過ぎていたが、氣分転換に車で出かけることにした。

愛車のラブフォードの乗り込み、夜になつて落ち着きつつある土曜日の街を走る。

この車は大学生のときにも無理をしてローンで買った。中古で買ったのでたまに調子が悪いときもあるが、でも、まだ十分に走る。そういうえば、この車で優貴とはずいぶん色んなところに出かけたな、と、池田はつい感傷的な気分になつた。

他人から見たらたぶんこんな感情は滑稽で、自分に酔つているようにならぬのがどうが、しかし、そうとわかつていても、池田は下降線を描いていく自分の気持ちを抑えることができなかつた。

思いつゝままに車を走らせてやがて池田が辿り着いたのは港だつた。池田は車を止めると、車の窓から見える港の明かりをぼんやりと眺めた。

フヨリーだらうつか、大きな船が止まり、その周囲の、淡いオレンジ色がかつたネオンの光がきれいだつた。そんな淡い色合いの温かみのある光は、池田の心を慰めるでもなく、池田の心に静かに体積

していった。

池田は長いあいだそうして港の明かりを眺めていてから、また車を運転して自分の町まで戻った。車を運転したことで、さっきまでふさぎ込んでいた気分も、少しはマシになつた気がした。

池田は車で自分のアパートまで戻る途中で、ふと思いついてレンタルビデオ店に寄ることにした。家に帰つても退屈なので、なにか時間を潰すためにDVDでも借りようと思つたのだ。

池田が立ち寄つたレンタルビデオ店は本屋も一緒に入つていている。池田はせつかく機会なのでDVDを借りたついでに何か面白そうな本でもないかと見て回ることにした。

本屋の目立つ場所には、今売れている小説が平積みされていた。池田は試しにその本を手に取ると、パラパラとページを繰つてみた。なんでもこの小説は、人気のある芸能人がはじめて書いた小説らしい。

池田ははじめて小説を書いた人間が最初からこんな商品になるような小説を書くことができるなんてすごいなど感心する一方で、東京の友人のことが少し不憫にもなつた。

池田の大学時代の友達にはひとり、東京に出て、アルバイトをしながら小説を書いている人間がいる。その友達とはたまにメールでやりとりをしているのだが、彼の話では、今のところ彼が小説家としてデビューできる見込みはなさそうだという話だった。結局全てのことはめぐり合わせだし、誰が悪いわけでもないのだが、池田は友人のことを考えると、少しやりきれない気持ちにもなつた。

池田がやつやつて本を手にとったままほんやつと考へりとをして
いると、

「なにしてん？」

と、急に背後から声をかけられた。

池田が驚いて後ろを振り返つてみると、そこには泉谷太陽が笑顔で立っていた。泉谷太陽は、池田の高校のときからの友人だ。今でも定期的に飲みにいつたりしている。

「びつくりしたわ」

と、池田が呟くよつこ言ひとい

「びつくりしたじやあらへんがな」

と、泉谷は笑つて言つた。家が近所なので、泉谷にことばいりしてたまにばったり遭遇することがある。

「何か買'うん？」

といつ泉谷の問ひに、池田は頭を振つた。

「いや、もうDVDは借りててな。せつかくやし、どんな本があるんやろつて見とつただけやで」

池田はハリウッドのアクション映画を一本借りた。

池田の返事に、太陽は曖昧に相槌を打つと、

「もし暇やつたら、これから飯食いにいかへん？」

と、唐突に提案してきた。

「そうやなあ」

と、池田は頷くと、自分の腹に手をやつた。考えてみると、今日昼にパスタを食べてから何も口にしていなかつたことに、池田は今更のようすに気がついた。

「じゃあ、すぐそこのファミレスに行こ」

と、泉谷は池田の返事を待たずに勝手に決めて言つた。

泉谷はレンタルビデオ店まで自転車で来ていたので、帰りに自転車はまた取りに戻ることにして、池田の車と一緒に車でファミリーレストランまで向かうことになった。

ファミリーレストランはレンタルビデオ店から車で十五分程走つたところにある。

駐車場に車を止めると、ふたりは店に入った。

店内に入ると、大学生くらいの髪の毛を明るい茶色に染めた女の子が、いくらか面倒くさそうにふたりを奥の窓際の席に通してくれた。

ファミリーレストランはさすがに休日の夜ということもあって混雑していた。学生風の男女の入り混じった集団や、五十歳代くらいの男性の集団など様々なひとたちがいて、それらのひとたちがあげる喋り声や、笑い声で、店内は少し騒がしいくらいだった。みんな楽しそうで、悩み事なんてなにもないよう気に見える。

池田は席につくと、何を食べようかと早速メニューを手に取った。そしてそのときに、ふと窓ガラスに映った自分の顔を見て、池田は違和感を覚えた。

そこに映っている自分の顔が、まるで他人の顔みたいに見えるのだ。今日はもともと出かける予定ではなかつたので髪は剃つていな

かつたし、おまけにメガネを（普段はコンタクトをしている）かけているせいで、五つくらいはふけて見えるような気がした。そしてただ単にふけて見えるというだけじゃなくて、自分の顔は何かにぐつたりとつかれきっているように見えた。

席に取り付けられている呼び出しボタンを押してウェイトレスを呼び、池田はハンバーグ海老フライのセットを注文し、泉谷はカツカレーを注文した。

注文した料理はすぐに運ばれてきて、その料理を食べながら、池田と泉谷は思いつくままに話をした。お互いの仕事の話（泉谷は建築事務所に勤めている）や、最近観た映画の感想。共通の知人に関する話題。天気の話。

泉谷が最近同棲している彼女と大喧嘩をしてしまったという話をはじめたのは、お互いに料理を食べ終わってからだった。

「いや、実はな、この前、彼女と大喧嘩してん」

と、泉谷はお冷の入ったグラスを口元に運びながら何故か楽しそうな口調で語った。

「そりなんや」

と、池田は答えようがなかつたので、とりあえずという感じで相槌を打つた。

「何が原因で喧嘩になつたん？」

と、池田がふと氣になつて尋ねてみると、泉谷は、

「いや、俺が彼女の誕生日を忘れとつてな」

と、苦笑して答えた。

「それはいざちやんが悪いよな」

と、池田は半ば呆れてコメントした。

「でも、しゃあないんやつて」

と、泉谷は池田の科由に開き直つて答えた。

「その前の日とかや、仕事でずっと徹夜が続いとつて、ほんとに死じやうやつてんから」

「でも、それはいいわけにならへんで」

と、池田は軽く笑つて意見を述べた。

「忙しくなるのわかつてねんから、あらかじめベツの日に誕生日プレゼント渡すとかしといたりよかつたやん」

「まあ、やうなんやけどな」

と、泉谷は認めた。

「でも、仲直りはできたんやろ?」

と、池田が確認を取つてみると、

「一応な」

と、泉谷は短く頷いた。

「でも、その変わり、めつちや高い抱買わされたけどな」

と、泉谷は苦笑して続けた。

「まあ、それくらいはしゃあないやろ」

と、池田は泉谷の不満そうな表情が面白くて少し笑つた。

「池ちゃんは最近どうなん? 彼女とは上手くいってんの?」

と、泉谷は再びテーブルの上のお冷を手に取ると、改まった口調で尋ねてきた。

池田は泉谷の問いにどう答えるか、少し迷つた。というのも、いま彼女に振られかけているということを告げるのが、なんだか格好悪い気がしたからだ。でも、軽く躊躇つたあと、正直に告げることにした。というより、池田は誰でもいいから相談したくなつたのだ。

優貴のことについて。どうしたらいいのか。

池田は軽く言い濶んでから、この前の優貴とのいきさつを太陽に話して聞かせた。テートの帰りに突然別れたいと告げられたこと。でも、池田はまだ別れたくないと思っていること。今日久しぶりにメールを送つてみたのだが、未だに返事がもらえずになっていること。

泉谷は池田の話を聞き終えると、

「それはヤバイな」

と、微笑して答えた。

「池ちゃん、何かしたんちゃう?」

「いや、べつになんも心当たりはないなんけどな」

と、池田は泉谷の言葉に力なく笑つて答えた。

「強いていえば、ここんとこずっと仕事が忙しくて会えへん日が続いてたつていうのはあるかもわからんけど」

「たぶん、原因はそれやで」

と、泉谷は池田の科白に笑つて言つた。

「池ちゃんがなかなか会つてくれへんから、すねてるんやつて。きっと

「そうなんかなあ」

と、池田は言つてから、軽く首を傾げた。それから、テーブルの上のお冷を手に取つて口に含む。

もし、泉谷の言つている通りだとしたら、まだ救いはあるような気がした。しばらくすれば優貴の機嫌も直るだろうし、なんとかなるかもしれないと池田は希望を感じた。しかし、その一方で、優貴が自分と別れたいと口にしたのは、太陽が述べたような理由ではないことが、池田にはなんとなくわかつていた。

たぶん、何か他に理由があるのだ。それも、救いようない理由が。でも、そのことを口に出して言ひてしまつと、それが現実のことになつてしまつ。そうで怖かったので、池田は敢えて自分の考えは口にしなかつた。

「池ちゃんって、今の彼女と付き合つてから何年やつたけ?」

池田が黙つて自分の思考のなかに沈み込んでいたと、ふと思いついたように泉谷が口を開いて言つた。

「今年でもう三年目やな」

と、池田は少し考えてから答えた。

「そりなんや」

と、泉谷は池田の返事に頷くと、

「もしかして今の彼女が今までのなかで一番長く続いているんぢやう?」

と、笑顔でからかうように言つた。何しろ、高校のときからの付き合こんなので、お互いの恋愛事情についてよく知つてゐる。

「まあ、そりやなあ」

と、池田は曖昧に微笑んで頷いた。付き合つはじめたときは、まさか「これほど長く続くとは思つていなかつた。

「もしかして結婚とかも考えたりしてんの?」

と、泉谷は洋服の胸ポケットからタバコの箱を取り出すと、池田の顔を見て、冷やかすように言つた。

「まあな」

と、池田は微笑して頷いた。

「もうちょっと収入が上がつて落ち着いたら、結婚してもいいかなつて思つてたりはしたけどな。もう俺もいい歳やし」

「確かに」

と、太陽は池田の発言に軽く笑つて同意した。

「俺らのまわりのやつら最近みんな結婚してんもんな」

池田は太陽の科白に曖昧に微笑んで頷くと、

「でも、こんなことになつてしまつた以上、結婚はなさやつやけど

な」

と、池田は付け足して言つてから血潮氣味に口元で弱く笑つた。

つられるようにして泉谷も少し口元を縋ばせると、

「でも、まだわからへんて」

と、泉谷は励ますように言つた。

「ここの前、彼女は考えさせて欲しきつて言つてたんやろ？ もうちよつと待つてみたら？ そのうち機嫌もなおるかもしねへんで。ていうか、たぶんすねてるだけやと思うけどな」

泉谷は明るい口調でそつ言つて、軽く笑つた。

「そつやつたらいいんやけどな」

と、池田は泉谷に誘われるよつにして少し笑つた。この前の優貴の表情を思い出すと、とても泉谷の言つている通りだとは思えなかつたが、しかし、その一方で、泉谷の言つてることを信じたいと思つ気持ちは強かつた。

「だけど、俺たちもう二十八なんよな」

と、池田が黙つていると、泉谷が嘆くよつに言つた。

「どうしたん？ 急に？」

と、池田が可笑しくなつて尋ねてみると、

「いや、なんか信じられへんなと思って。自分が二十八歳なんて」と、泉谷は持つていたタバコにライターで火をつけて、苦笑する

「もう」口元を歪めて言った。

「やつやな」

と、池田は泉谷の科白に口元で弱く微笑んで頷いた。実際のところ、内面的な部分は二十歳の頃とそれほど変わっていないような気がした。年齢だけが前へ前へと一人歩きをしていつているような感覚がある。

「もう完全におっちゃんやな」

と、泉谷は軽く笑つて言つと、タバコを一口吸つた。

池田も泉谷に誘われるようにして笑いながら、

「いづちゃんは高校のときとか、二十八歳の自分ってどうなつてると思つてた？」

と、ふと思いついて尋ねてみた。

すると、泉谷はタバコの煙を口から吐き出すと、思案するように視線を斜めうえにあげた。そして、それからしばらくなしてから、「よくわからへんけど、とにかくすごくなつてると思つてたな」と、泉谷は首を傾げて笑つて答えた。

「俺は高校んときは建築家になるのが夢やつたし、だから、二十八歳の自分は世界的な建築家になれると思つてたな」

と、泉谷は微笑しながら過去の自分の無邪気な妄想を告白した。

「俺も似たようなこと思つてたな」

と、池田は泉谷に科白に共感して少し笑つた。

「池ちゃんは高校のとき、何になりたかつたん？」

「俺はプロのギターリストやな」

池田は泉谷の問いに答えながら、恥ずかしくなった。池田は高校生くらいのときまでは本気でプロのギターリストになれる信じていた。というより、あの頃は何にだってなれる気がしていた。特に根拠もなく、過剰なほど自信があった。

「でも、最近は触つてもいいひんけどな」

と、池田は笑って続けた。池田がギターを辞めたのは大学二年のときだ。途中で自分の才能の不足に気がついてしまったのだ。最近はギターに触ることすらしてない。ギターは完全に今では部屋のインテリアと化していた。

「でも、みんなそんなもんやよな」

泉谷は池田の言葉に、どこか諦めたにも似た微笑みを口元に張り付かせて少しこな声で言った。

「みんなどこかでこんなものかって諦めたり、妥協したりしてるんなよな」

「確かにな」

と、池田は小さく笑つて頷いた。

それから、池田はふと窓ガラスの向こうに見える外の景色に視線を向けてみた。外の世界は夜の暗闇に黒く塗りつぶされていて、その黒い世界に横断歩道の赤い光がぼんやりと浮かびあがっているのが見えた。

「人生つてなかなか上手くいかへんもんやよな」

そう言って、太陽が静かに笑う声がどこか遠くに聞こえた。

確かに、人生はなかなか上手くいかない、池田は会社の窓の外に見える灰色の空を見つめながらため息をつくように思つた。

でも、人生とはそんなものなのだろう。仕方のないことだ。それにもし仮に何もかもが思い通りになつたとしたら、きっと人間は成長しないだろう。これは誰かの受け売りだが、挫折があるからこそ、ひとは学ぶことができるのだ、と、池田は自分に言い聞かせた。

でも、それにしてもな、と、池田は一方で思つ。上手く行くことよりも、上手くいかないことの方が、ちょっと多すぎるんじゃないのか、と。池田はいるかどうかもわからない誰かに対して抗議したくなつた。もうちょっとなんとかなりませんかね、と。

池田が今の会社に就職したのは一十六歳のときだ。それまではフリーターをしながら公務員を目指していた。でも、なかなか採用試験に受からず、途中で諦めていまの会社に就職した。

そうしたのは、このままで結果が出せないままに歳を取つてしまつのが怖かつたからだ。歳を取れば取るほど就職先を見つけることが難しくなるだろうと思つた。手遅れにならないうちにと思つた。

そして現在の生活がある・・・だが、正直、それほど心躍る毎日ではない。べつにいまの仕事が嫌いなわけではないが、かといって、この仕事をずっと続けていきたいと思えるほど愛しているわけでもない。何よりもネックなのは拘束時間が異様に長くなつたことだ。

入社した当初はそれほどでもなかつたのだが、最近は朝の八時に出勤して、夜の九時十時まで残業するのが当たり前になつている。それで残業代はつかない。土日も満足に休みを取ることができない。こんな生活がこれからあと何十年も続くのかと思うと、池田は暗澹とした気持ちになつた。

「 いっそ今会社を辞めようかと思わないでもないのだが、経済的な問題もあるのでなかなかそういうわけにもいかない。転職したとしても、どこ会社も条件は似たようなものだという気がする。」

「 なんとかしなきやな、と、池田は思つ。もつともの「こと」をポジティブに捉えることができるようにならなければ、どちらかだ、と、池田は思つ。もつと今の仕事を好きになつて仕事に追われる毎日でも楽しいと思えるようになるか、もしくはべつの道を見つけるか。でも、具体的にどうすればいいのだろう?」

「 おい、池田」

と、池田がそこまで考えたところで、突然、大きな声で名前を呼ばれた。声の聞こえた方向に視線を向けてみると、いつからそこに居たのか、主任の大島が自分のデスクの前に立つている。大島は池田よりもひとつ年下なのだが、池田よりも社歴が長いということもあつてか、池田のことを呼び捨てにしていた。

「 なにほおつとしてんだよ」

と、主任は半笑いで言つた。主任はもともと大阪出身の人間なのだが、大学で東京に行つていたとかで、何故か標準語でいつも喋つた。

「 すみません」

と、池田はとりあえず頭をさげた。ほおつとしていたのは事実な

ので何も言えない。

「お前が、今度土曜日どうせ暇だろ？」

と、主任は勝手に決め付けて言った。

いや、その日はやつと予定があると池田は口を開きかけたのだが、主任はそれを無視して言葉を続けた。

「悪いんだけど、今度土曜日、俺の変わりにA社のメンテナンス行つてくない？ほんとうは俺の担当なんだけどさ、ちゅうと用事ができちゃったんだよ」

池田の勤めてる会社は他の会社のネットワークの管理と保全を行っている。

池田はこのところ休日出勤多くて今度の土曜日はやつ休みたいと思つていた。そのことを池田が口にしようとしたとき、それを大島は遮つて、

「じゃあ、決まりな。しつかりやつてこよ」

と、主任は池田に手をあげて、もう用は済んだとばかりに池田に背を向けて歩いていった。

池田はそのままの主任の背中に向かつて自分の椅子を投げつけたいような衝動に駆られたが、どうにか我慢した。

池田の乗つたエレベーターは田町の一階に到着する前に五階で停止した。

旧型のエレベーターのドアがゆっくりと開く。これでぱつたり主任とかと鉢合わせになつたら嫌だなと池田が思つてゐると、開いたエレベーターのドアの前に立つてゐたのは中島だった。中島はエレベーターに乗つてゐる池田の姿を認めるに、少し嬉しそうな笑顔を見せた。

中島は小走りでエレベーターのなかに乗り込んでくると、「これから外回りですか？」

と、明るい声で尋ねてきた。

池田は中島の問いに頷いた。これからルート営業にいかなくてはならない。

「大変ですね」

と、中島は小さく笑つて言つた。

池田がいつして中島とふたりきりで口を開くのは、先週カフュで中島の話を聞いていらいだつた。

「中島さんは何階？」

池田は再びエレベーターのドアがゆっくつと戻ると、中島の目的の階数を確認した。

すると、中島はエレベーターのパネルに表示された階数に目を向けて、

「あ、わたしも同じです」と、微笑して答えた。

「お昼取るの遅くなっちゃつたんで、これからコンビに行くところなんですね」

と、中島は口元に浮かべた微笑をそのままこいつわけるように続けた。

少しの沈黙があつて、降下をはじめたエレベーターの微かな稼動音がその沈黙を満たした。

「わたし」

と、短い沈黙のあと、中島はやや躊躇つてから口を開いた。池田が中島の顔に視線を向けると、

「わたし、やっぱり会社辞める」としました

と、中島は心持顔を俯けるようにして少し早口に告げた。

「やっぱやめるんや」

予期していたことではあつたが、池田は彼女がいなくなつてしまふのだと思つて、残念だった。

「あれから色々考えたんですけどね・・・でも、やっぱなんと思つて」

と、中島はざわざ申し訳なさそうに小さな声で言った。

「まあ、働く場所はべつにこじかないわけじゃないしな」

と、池田はできるだけ優しい声で言った。

「ねつですね」

と、中島は池田のかけた言葉に少し寂しそうな声で頷いた。そして何秒間の沈黙のあと、

「池田わんつて、今度の十曜日とかって暇ですか？」

と、中島は唐突に尋ねてきた。

土曜日はせつせせ仕事に突然おしつけられた仕事がひとつ入つてたが、夕方からなら時間はあるはずだった。そのことを池田が告げると、中島は微笑んで、

「あの、もし良かつたらライブ来てくればせんか？」

と、提案してきた。

「ライブ？」

と、池田が少し怪訝に思つて尋ねると、中島は恥ずかしさで小さく笑つて、

「ライブっていうのもべつにわたしがライブするわけじゃなくて、わたしの彼氏がバンドやってて、それでライブやるみたいなんんですけど、もし良かつたらどうかなって思つて」

と、中島は遠慮がちな声で説いた。

池田は中島が友達料金にしてくれるところで、そのライブに行くことを承諾した。

そのままひたすらの乗つたエレベーターは一階に到着した。

エレベーターのドアが開くと、中島は、

「じゃあ詳しいことはまたあとでメールしますね」

と、微笑んで言った。そして中島は池田に向かって軽く頭を下げるといつた。

池田はエレベーターから降りると、そのまま中島から手渡されたチケットに視線をぼんやりと落とした。

つまらない浮き沈みを繰り返しながら、いつも通りの毎日が過ぎていく。幸せのような、不幸せのような日々。

八月が終わり、九月がはじまった。夏の日映いばかりの太陽は少しずつその輝きを失っていき、その代わりに秋の到来を思わせる涼しい風が町に吹き渡るようになった。

セミたちが最後の力を振り絞るように大きな声で鳴いている。

池田は先週の土曜日に優貴にメールを送つて以来、ずっと連絡を取るのを我慢していたが、（結局、池田が以前送ったメールに対して優貴からの返事はなかった）金曜日の夜、どうしても不安な気持ちに耐えられなくなつて電話をかけてしまった。

たとえ望ましい結果が得られなかつたとしても、池田は優貴の声が聴きたかった。このまま別れことになるとしても、こんなふうに曖昧なまま終わつてしまふのが嫌だった。

最後に優貴が電話をかけてきた日の着信履歴を呼び出し、優貴に電話をかける。ついこの前まで毎日のように電話をかけていたのに、その日ははじめて電話をかけるときのようにひどく緊張した。

一回田の呼び出し音がなり、二回田の呼び出し音がなる・・・そして十回田の呼び出し音が鳴つたところで、池田は諦めて電話を切つた。

優貴は電話に出なかつた。

もしかしたら、優貴はいま忙しいのかもしかつたが、でも、なんとなくそうではないような気がした。部屋に居て、ケータイのディスプレイに表示された池田の名前を見つめたまま、電話が切れるのをじっと待つている彼女の姿が目に浮かぶような気がした。

そんな彼女の姿を想像すると、池田は傷ついた、寂しい気持ちになつた。

11

土曜日、池田は主任に頼まれた仕事を片付けると、その足でそのまま心斎橋に向かつた。心斎橋で中島が言つていたライブがあるからだ。

ライブには泉谷も一緒に誘つた。泉谷を誘つたのは、ひとりで行くのが心細かつたからだが、泉谷も大学生の頃、池田と同じようにバンドをやついていたことがあるので、もしかしたら興味があるかもしれないと思つたのだ。

池田が誘つと、泉谷はその日は特に何も用事なかつたよつて、ふたつ返事で一緒にライブに行くことを承諾してくれた。

泉谷とは心斎橋の駅前で待ち合せをして合流した。

泉谷は池田がステッサ姿なのを見ると、

「なんでスー、ツなん？」

と、少し可笑しそうに笑つて訊いてきた。

「いや、今日さつままで仕事しどってん」

と、池田が笑つて弁解すると、泉谷は、

「大変そーやな」

と、笑つて同情するように言った。

中島が言つていたライブハウスは駅から少し離れた地下にあった。受付でチケットを買い、ライブハウスに入る。

ライブハウスは百人入るのがやつというくらいの小さな会場だつた。薄暗いライブハウスでは演奏前らしい数人のバンドマンたちがそれぞれの楽器のチューニングをしている。池田はそんな彼等の姿を見つめながら微笑ましい気持ちになつた。自分も何年か前ではこんな小さな会場で演奏をしていたことがあつたな、と、懐かしくなつた。

チケットにはソフトドリンクの券がついているので、池田が係りの女の子にチケットを渡して、紙コップにコーラを注いでもらつていると、

「池田さん」

と、背後から声をかけられた。

池田がふと後ろを振り返つてみると、そこには中島が笑顔で立っていた。

「ほんとに来てくれたんですね」

と、中島は嬉しそうな笑みを浮かべて言つた。

「うん。中島さんの彼氏がどんな演奏するのか見てみたかったしな」と、池田は曖昧に微笑んで答えた。

それから、池田は自分のとなりでビンが屈心地悪そうな笑みを浮かべている友人のことを、中島に紹介してやつた。すると、中島は、「中島です。会社ではいつも池田さんにお世話をなっています」と、丁寧に頭を下げた。

「こんなやつにそんな頭さげでもいいで」

と、池田が笑つて言つた、

「こんなやつてなんやねん」

と、池田のとなりで泉谷は笑つて言つた。それから、泉谷は中島に改めて視線を向けると、

「どうも泉谷です。よろしく」

と、少し恥ずかしそうに笑つて言つた。

「中島さんの彼氏は楽器はなにやつてんの？」

と、池田はさつきいれてもらつたばかりの「一」を口元に運びながら、ふと気になつて尋ねてみた。すると、中島はちらりとステージの方に視線を向けて、それからまた池田の顔に視線を戻しながら、「一応ギターボーカルです。あの背の高いひとがそうなんですけど」と、心持ち照れ臭そうな口調で説明した。

池田は中島の説明を受けて、ステージでギターの調弦をしている、すらりと背の高くて、髪の長い男に目を向けた。目つきが少し鋭が、でも、整つた顔立ちをしている。中島はこんなひとを好きになるんだ、と、池田は何故か意味もなく嫉妬の混じつた喪失感を抱いた。

「だけど、池田さんたちが間に合つて良かつたです」

と、中島は微笑んで言つた。

「わたしが池田さん誘つたときつて、彼氏のバンドが何番目にやるかとまだ決まってなかつたから、池田さんたちが間に合つかどうかちょっと心配だつたんですよ」

池田のときもそつだつたが、大抵のアマチュアバンドのライブは、何組かのバンドが集まつてそれぞれ順番に演奏する。その方がスタジオ代などが安くなるし、アマチュアバンド一組では集客力に欠けるからだ。

と、そのとき、奥の方から「まゆーー」と、彼女の名前を呼ぶ声が聞こえた。見てみると、ステージの前の方に中島と同年齢くらいの女の子たちが何人か集まつている。中島は中島で友達と一緒に来ているのだろう。

「あ、すみません」

と、中島は微笑して言つと、池田たちに軽く会釈をして、名前を読んでいる友達のもとへと歩いていった。

そして中島が友達のもとへ歩いていくのとほぼ同時に、スタジオの照明の照明が落ちて、演奏がはじまった。

中島の彼氏たちのバンドの演奏は、池田が想像していたよりもずっとレベルが高かつた。普通にプロとして通用しそうな気さえする。少なくも日本のヒットチャートを賑わせている一部の即席のミュージシャンよりはずつとレベルが高いように池田には思えた。どうして彼らが未だにこんな小さな会場で演奏しているのか池田には不思議だった。

ライブが終わると、池田と泉谷は駅近くにある居酒屋に入った。夕食がてらに飲んでいこうといふ話になつたのだ。

池田と泉谷はとりあえずといつ感じでビールを注文した。それと一緒につまみをいくつか適当に注文する。

「でも、なかなか良かつたよな」

と、池田は注文したビールが運ばれてくると、さつき見てきたばかりのライブの感想を述べた。

「そうやな」

と、泉谷は池田の感想に微笑して同意した。

「池ちゃんからアマチャアつて聞い」とつたからや、あんま期待してへんかつたんやけど、普通に良かつたな。あれやつたらCDで売つてもおかしくないって」

泉谷は口元に浮かべた微笑をそのままに続けると、テーブルのうえのビールを手に取つて少し飲んだ。

「ほんまやな」

と、池田は頷きながら、泉谷に続いてビールを飲んだ。

「なんであれだけレベルが高い曲が作れてんのに、未だにデビューできないんやろうな」

と、池田は手にしていたビールを机の上に戻しながら思つたことを口に出した。

池田はさつき聞いたばかりの曲を思い出した。中島の彼氏のバンドが演奏した曲は、静と動が入り混じったような雰囲気の曲だった。激しいのに静かで、怒りに満ちているようで、優しいようでもある。

「でも、まあ、仕方なんいけやつ?」

と、泉谷は池田の言葉に軽く笑つて答えた。

「必ずしもいいものが売れるわけじゃないからな」

「まあ、やうなんやけどな」

と、池田は弱く頷いた。それから、一口口田のビールを口元に運ぶ。

確かに泉谷の言つとおりだった。こま自分が思つてこぬやうにとを感じてゐるひとは世の中にほきつとたくさんいるのだらう。結局、仕方のないことなのだ。誰にもどうすることもできない。でも、そうとわかつていても、池田はどうか納得できなかつた。

「結局、全では運なんよな」

と、池田が小さな声で嘆くように言つと、泉谷は、

「まあ、でも、運も含めて実力やからな」

と、言い含めるように軽く笑つて答えた。

「でも、ほんとうにいいものが埋もれてしまつたのもたい
なくない？」

と、池田は食い下がつた。すると、泉谷は、

「やうやな

と、考え込むように頷いてから、

「でも、ほんとうにいいものやつたら、自然と世の中でこへつ
て」

と、じばりくじかから、なんでもなきつて笑つて言つた。

池田は果たしてほんとうにそつだらうかと思つたが、口に出しては何も言わなかつた。それから、池田は東京で小説を書いてゐる友達のことを少し、考えた。

「それに、まだ中島さんとの彼氏がデビューできないつて決まつたわけじゃないやん」

と、泉谷は運ばれてきたばかりのつまみを口元に運びながら、池田をなぐさめるでもなく微笑んで言つた。

「まあ、やうなんやけどな」

と、池田は口元で弱く笑つてから、泉谷と回りまわつてみんなを口に運んだ。

月曜日、池田は会社の廊下で中島とすれ違いかけたときには、この前のライブの感想を中島に伝えた。ライブの演奏が自分が想像していたよりもずっと良かつたこと。プロとしても十分通用するだらうと本氣で感じたこと。

池田がそう感想を述べると、中島は、「ありがとうございます。今度彼氏にあつたら池田さんがそいつについてたつて伝えておきますね」と、嬉しそうな笑顔で言った。
「彼氏、たぶんめっちゃ喜びますよ」と、中島は楽しそうに続けた。

「でも、もつたいないよな」

と、池田はこの前も泉谷と居酒屋で話したことを口に出した。「なんであれだけいい演奏ができるのに、まだデビューできないやうな？日本の音楽シーンとか、これってどうなん？って思つ曲とか一杯あんのにな」

「そうですね」

と、中島は池田の意見にちよつと困ったように曖昧に笑つて頷いた。

それから、中島は数秒間、感覚をあけてから、

「でも、わたしも池田さんと似たようなことはよく思つんですね」

と、続けて話した。

「「れはたぶん」

と、中島は少し躊躇つてから続けた。

「自分の彼氏だからっていう贔屓田もあるんだと思つんですけど、でも、わたしは彼氏の作る音楽がめちゃくちゃく良いこと思つて、それなのになんでなかなか認められないんだろ」つゝっとささげ思つことがありますね」

中島はそこまで話すと、池田の顔を見て、自分の話した言葉が深刻身を帯びてしまつたのを恐れるように口元で少し笑つた。

「中島さんの彼氏さんはまだデビューするのは難しそうなん?」

と、池田は気になつて尋ねてみた。すると、中島は、

「大阪では結構知ってくれるひともいて、なかには熱心なファンとかもいるみたいなんですけどね・・・でも、なかなか難しいみたいですね」

と、考え込むよつた表情で答えた。

「わんわんや」

と、池田はかける言葉が思いつかなくてただ頷いた。

「・・・彼氏、こまちよつと迷つてるみたいなんですよね」

と、中島は少し間をあけてから、いくらか小さな声で言つた。

「迷つてるつて?」

と、池田が気になつて尋ねてみると、中島は、

「わたしの彼氏、いまフリーターしながら音楽やってるんですけど、でも、今年で二十七歳で、だから、このまま音楽続けていくかどうか・・やっぱり将来のこととかもあるし、親も色々つむれみたいで」

と、心持顔を俯けるよつとして、少しこな口調で告げた。

「やつか。色々難しいよな」

と、池田は同情して言った。もし自分が中島の彼氏だったら、やはり同じように悩んだだろつと池田は感じた。

と、そのとき、向いの廊下から誰かが歩いてくるのが視界に入った。誰だらつと思つて見てみると、それは主任の大島だった。主任は池田と中島の姿に気がつくと、ふたりがいるところまで歩いてきて、

「おい、池田、お前、何セクハラやつてんだよ?」

と、半笑いで、冗談とも本気ともつかない口調で池田に声をかけてきた。

池田が主任の突然の意味不明な問いかけに上手くリアクションできずにいると、

「中島さん、氣をつけろよ。ここはロイヒとしか考えてねえんだから」

と、主任は中島に笑いかけて言った。

中島は主任の言葉に困ったように口元で曖昧に微笑んだ。

「もしレーベになにかされたら、こつでも俺に相談するんだよ」

と、主任は妙に優しい口調で中島に声をかけた。それから、主任は池田たちに背を向けて歩いていうことしたが、突然何か思い出したのか、立ち止ると、後ろを振り返つて、

「池田、そういえば、お前がさつき提出した報告書、あれ全然駄目ね。今日中に書き直して提出」と、告げた。

その報告書とこりの、この前池田が主任におしつけられた仕事の報告書で、本来であれば池田の仕事ではなく、主任の仕事のはずだった。報告書に不満があるのなら、最初から主任が自分でやればいいのだ。池田が不満に思つて黙つていると、

「わかつてんの？」

と、主任は脅すように語氣を強めて言つた。

池田はいぢいち口答えるのも面倒だったので、わかりました、と答えた。それで主任はやつと満足したようで、後ろ手でと軽く手を振ると、オフィスがある方に向かつて歩いていった。

「・・・あのひと、ほんとに嫌い

と、主任の姿がやつと見えなくなると、中島が小さな声でそつとうのが聞こえた。

武田洋介が電話をかけてきたのは、金曜日の夜だった。

池田はそのまま仕事を終えると、自分のアパートに戻り、とりあえずという感じでシャワーを浴びた。今週は珍しく休日出勤の予定もなく、ゆっくり休暇を過ごすことができそうだつた。

相変わらず優貴からの連絡はないままだし、特にやりたいことも、用事もなかつたが、しかし、これから少なくとも一日間は仕事（特に主任）のことを考えずにするのだと想つと、池田はほつとくつろいだ気持ちになれた。

さっぱりした気分で風呂から上がり、喉が渴いたので、ビールで

も飲もうかと冷蔵庫を開ける。そしてそのときに、池田は机の上においてあつたケータイのランプが点滅しているのにふと気がついた。自分が風呂に入っているあいだに、誰から連絡があつたのだ。

もしかしたら優貴から電話があつたのかもしないと思い、池田の動悸は早くなつた。開けかけていた冷蔵庫の扉を再び閉め、テープルのところまで歩いていく。そしておもむろにケータイを手に取り、着信履歴を確認する。すると、そこにはあつたのは、優貴の名前ではなく、大学時代の友達の名前だった。

彼の名前は武田洋介で、彼は大学を卒業したあと、東京にて、アルバイトをしながら小説家を目指している。

期待していた優貴からの連絡ではなかつたので少しがっかりもしだが、しかし、池田は着信履歴に武田洋介の名前を見つけたとたん、懐かしい気持ちになつた。彼とはもう二ヶ月ちかく連絡を取つていない。そのうちに連絡を取らなきやなと思いつつ、つい日々の雑事に追われているついに連絡を取るのを忘れてしまつていたのだ。

池田は慌てて友達に電話をかけなおそつとした。そして池田がリダイヤルのボタンを押そうとしたまさにその瞬間に、ケータイの着信音が鳴つた。画面に表示されている名前は池田が電話をかけなおせうとした本人からだつた。

「もしもし」

と、池田は電話の通話ボタンを押すと言つた。すると、

「もしもし」

と、耳元に懐かしい友人の声が広がつた。

「池ちゃん? 武田だけど、わかる?」

「久しぶりやな」

と、池田は軽く笑つて答えた。

「久しぶり」

と、電話の向い側で友人の声が嬉しそうに弾んだ。
「メールはちょくちょくしてたけど、いつもやって電話で話すのはほんとに久しぶりだよね」

「ねつやな」

と、池田は微笑して同意した。

「どうしたん?」

わざかな沈黙のあと、池田は用件を尋ねてみた。
「いや、実は友達の結婚式がそっちであつてね」

と、武田は答えた。

「だから、明日やつちに行くんだよ。それで、そのあとやつと会えないかなって思つて。急で悪いんだけど」

武田は少し申し訳なさそうな口調で付け足して言った。

「それやつたら全然大丈夫やで」

と、池田は笑つて答えた。

「どうせ明日は何も用事がなくて暇しどつてん」

「ほんと? やれなら良かつた」

「予定はどつなつてんの?」

と、池田は確認してみた。

「一応、三時くらいに式が終わる予定で、だから、五時くらいに梅田とかで待ち合わせてどつかな?」

「わかつた」

と、池田は武田の提案に頷いた。

「でも、一^レ次回とかは行かんでいいの?」

と、池田がふと氣になつて尋ねてみると、

「ほんとうは一^レ次回も誘われてるんだけどね、でも、池ちゃんに会えるのは明日くらいしかないから」

と、武田は微かに笑つて弁解するよ^リうに答えた。

「わ^タなんや」

と、池田は句と言つたらいいのかわからなくてとつあえず相槌を打つた。

「じゃあ、明日、楽しみしてるよ」

と、そう言つて電話を切つた友人の声は、氣のせいか、寂しそうにも聞こえた。

武田とは梅田の駅前で待ち合わせをして会流した。

それから町を少し歩いて、雰囲気の良さそうなパスタ屋に入った。店は、夕食にはまだ早い時間帯ということもあって、土曜日にしては比較的空いていた。

池田と武田は店員に奥のテーブル席に通されて、向かい合わせに腰かけた。

程なくして注文を取りに来た店員に、池田も武田もカルボナーラスパゲティのセットを注文した。

「だけど、ほんまに久しぶりやな」と、池田は注文を取った店員が厨房に戻っていくと、微笑んで言った。彼にこうして会つたのは先輩の結婚式以来なので、かれこれ三年振りくらいといふことになるのだろうか。

「そうだね」と、武田も微笑んで答えた。

「今日はこれからどうすんの？」

と、池田はふと氣になつて尋ねてみた。

「もし泊まるところが決まってないんやつたら、俺ん家に泊まつてくれてもいいけどな」

「ありがとう。でも、大丈夫だよ」

と、武田は池田の申し出に申し訳なさそうに微笑んで言った。

「友達がホテルとつてくれてるんや」

と、池田が納得すると、武田は、

「いや、そうじゃなくて。今日はこのあとすぐ夜行バスで帰るつもりなんだ」

と、武田は苦笑するように軽く笑つて答えた。

「今日来たばかりなのにすぐ帰るなんて大変やな」

と、池田は想像しただけで憂鬱な気持ちになつた。

「明日、バイト先がどうしてもひとが足りなくてね、仕方なんいだ」

と、武田は困ったように笑つて答えた。

「そつか。大変やな」

と、池田は曖昧に微笑んで頷いた。それから、テーブルのうえのお冷を手に取つた少し口に含む。武田も池田につられるようにしてお冷の入つたコップを口元に運んだ。

「小説は書いてんの？」

と、池田は手にしていたコップを机のうえに戻すと、なんとなく尋ねてみた。すると、武田は軽く眼差しを伏せるよひにして、

「一応ね。書いてる」とは書いてるよ

と、恥ずかしそうに口元で小さく笑つて答えた。

「早くデビューできるといいな」

と、池田は励ますよつに言った。

「そうだね」

と、武田は頷いたが、どこかその表情は浮かなかつた。

間もなくすると、池田と武田が注文した料理は運ばれてきた。ふたりはその料理を食べながら、思いつくままに話をした。お互いの共通の友人のこと。最近観た映画の感想。天気の話。お互いが覚えているようで覚えていないような思い出話。何しろ久しぶりなので話題が尽きることはない。

そのまま店が混み合ってきたので、ふたりは勘定をすませると、店を出た。

店を出ると、外には、夏の終わりを思わせる涼しい風が吹いていた。空気には微かに秋の匂いがまざりはじめている。風に吹かれて街路樹の木々の葉が揺れて、池田はそんな木々のざわめきを聞いているうちに、ふと、懐かしいような、寂しいような、よくわからないう気持ちになつた。

辺りはすっかり日が暮れて暗くなり、ネオンの光が大阪の町を温かく彩つていた。土曜日の夜といつこともあって、町を行きかうひとびとの顔はどこかみな華やいで見える。

武田の乗る予定のバスの時刻は、夜の十時半で、まだそれまでには時間があったので、ふたりは駅近くまで戻ると、その付近にあったセルフサービスのカフェに入った。店に入ると、池田はアイスのカフェラテを買い、武田はブレンンドコーヒーを買った。

店は休日の夜といふこともあって混雑していたが、ふたりはなんとか席を見つけて腰を降ろした。

「やっぱ混んでなあ」

と、池田はカフュの混み具合にささかうんざりしながら言った。
こんなに込み合っていたのでは、なかなか落ち着いて話をすることが
できない。

「みんな考へることは同じだからね」

武田は池田の科白に軽く笑つて答えた。それから、武田はせりき
買つたばかりのコーヒーを一口啜ると、

「池ちゃんは最近仕事はどう?」

と、ふと思いついたように尋ねてきた。

「ほあ、ぼちぼちやなあ」

と、池田は武田の問いにかけに、苦笑するよつに笑つて答えた。
「やりがいとかがないわけじゃないけど、でも、そんな楽しいとか
じゃないよな」

池田は口元に浮かべた笑みをそのままに正直な実感を述べた。
「正直、生活のために働いてるって感じなんかな。・・・人間関係
とか色々あるしな・・でも、まあ、結局、働くってそういうことな
んかもしらんけど」

「せつか

と、武田は池田の答えに、どつ返事をしたらこうのかわからぬ
様子で、曖昧に微笑んで頷いた。

「俺も、武田みたいになんかやりことがあつたらいいんやけどな」

と、池田は武田の顔を見て、自嘲気味に弱く笑つた。

「どうだううね」

と、武田は池田の科白を肯定するでもなく、ただ口元で小さく笑
つた。

わずかな沈黙があつて、その沈黙なかに、周囲の客の話声や、店
内に抑えたボリュームで流れている古いジャズの音楽が聞こえた。

今流れている音楽は、静かで優しい感じのするじつとりした音楽だつた。

たとえばもつと秋が深まって、肌寒くなってきた頃に、微かに黃金色の色素を含んだ透明な日の光が、葉を落としあじめた木々の枝々をそつと照らしているような。親密で、穏やかで、それでいてどこか物悲しい印象を受ける。

そういうれば、この音楽はどうかで聴いたことがあるな、と、池田はふいに思い出した。一体どこの音楽だ。しばらく考えて、いるうちに、池田はやがて思い出した。

あれは確か大学生のときだ。大学生のときに付き合っていた女の子が、池田の誕生日にジャズのCDをプレゼントしてくれたことがあつた。そのCDのなかに、いま流れている音楽が確かに入っていたのだ。

池田はどうして自分はその子のこと別れてしまつたのだろうと後悔した。その子は結構真剣に自分のことを好きでいてくれたのに。

「……実はわ」

と、池田が流れている音楽に耳を傾けながら、過去の記憶に思いを巡らせていくと、それまで黙つていた武田が「くらか言つづらうに口を開いた。

池田が顔をあげて、友人の顔を見つめると、武田は逃げるよつこそれとなく眼差しを逸らした。そして躊躇つよつてわずかに間をあけから、

「実は今度、俺、実家に帰るうかと思つてゐるんだ」

と、武田は告げた。そして、武田はそう言つてしまつてから、どん

な表情を浮かべたらいにのかわからないとこったよつて、こくらか
ぎこちなく口元を笑みの形に変えた。

「実家に帰る?」

と、池田は意味がよく飲み込めなくて友人が口にした言葉を小さな声で反芻した。武田の実家があるのは富崎だ。池田はずっと昔に武田とはじめて会ったときに、お互いに緊張しながら自己紹介を交わしている場面を思い起こした。そのとき彼は富崎出身で、大阪には大学進学ででてきたと話していた。

「俺の実家つて、自営業やつてるんだけど、だから帰つて、その手伝いをするのも悪くないかなつて最近思つて」

武田は口元に笑みを湛えたままいいわけするように続けた。

「俺もいい加減いい歳だしね・・・いつまでもアルバイトで生活しているわけにもいかないし、そろそろ区切りをつけないと思つて」

武田はそう言つてから、弱く笑つた。

「じゃあ、もう小説は書かへんの?」

と、池田が気になつて尋ねてみると、武田は黙つて頷いた。

「そつか」

池田はただ頷いた。どう言つたらいいのかわからなかつた。また少しの沈黙があつて、その沈黙のなかに周囲の喧騒がそつと溢れた。

「・・・大学を卒業してからこれまでやつてみて」

武田はしばらぐの沈黙のあとで口を開くと、ゆっくりとした口調で言つた。

「やつとわかつたよ。自分には才能なんてなかつたんだつて

武田はそう言つてから、寂しそうに少し笑つた。

「でも、まだわからへんぢやうん?」

池田は友人の顔を見つめて言った。

「実家に帰るのはいいとしても、べつに小説家になるのは諦めんでもいいぢやう？好きだつたら、趣味でも続ればいいんぢやう？」

池田の言葉に、武田は微かに首を振った。そして、「中途半端に続けたら、未練が残りそうな気がするんだ」

と、口元で弱く微笑んだ。

「そつか」

と、池田は頷いた。確かに、このままいつまでもアルバイトで生活していくのは大変だろうし、将来のことや、生活のことを考えると、武田の選択は正しいのかもしけなかつた。また中途半端に小説を書き続けると、未練が残りそうな気がするという武田の言葉も理解できなくなはなかつた。ただ、そうとわかつていながら、池田は残念な気がした。

池田はどこかで武田の夢を追つ生き方に自分を重ねていたようなところがあつた。だから、武田が夢を追つことを諦めたといつことは、そのまま自分の夢が叶わなかつたような喪失感を、池田にもたらした。

池田はふと色んなものが失われていくな、と感じた。若さや、夢や、希望といったもの。ポケットの底にほんのわずかに残つていたものまで消えていつてしまつ。

「また富崎にも遊びにきてよ」

と、武田はいくらか深刻になつてしまつた雰囲気を取り繕つこよに無理に明るい口調を装つて言つた。

「富崎に帰つちゃたらなかなか会えなくなると思ひけど、年賀状くらこは出すと思ひし」

「やうやな

と、池田は武田の言葉に弱く微笑んで頷いた。

そのうちにバスの時間がやつてきて、ふたりはカフェを出ると、バス乗り場までの短い距離を一緒に歩いた。あまり会話は弾まず、沈黙のあいだにぽつんぽつんと言葉をおいていく感じだった。もう夏も終わりだねという話を少した。空には明るい月が浮かんでいた。

最後、バスのなかからカーテンをあけて、自分に向かつて手を振った友人の顔が、池田のいま見えている視界に重なるように残つていつまでも消えなかつた。

九月も半ばを過ぎた頃から秋はその存在を急速に際立たせていき、まだ微かに残っていた夏の余韻のようなものを遠くへ押しやついていった。気のせいいか色んなものの色素が薄れしていくような気がした。町を照らす日の光。空の色。木々の葉の色。空き地に茂る草の色。

結局いつまで経っても優貴からの連絡はないままだったが、しかし、次第に池田のほうでも優貴のことを思い出すことは少なくなつていった。池田が優貴に連絡を取ることを試みたのは、一週間前の土曜日が最後だった。それからは一度も電話もメールもしていなかつた。

一度も連絡を取ることを試みて、それで駄目だったのだから、結局のところ、もうどうしようもないのだろうと池田は判断した。優貴を失つてしまふのは哀しかつたが、しかし、池田にもプライドがあつた。無理をして、ストーカーと勘違いされるようなことまではしたくなかった。

中島はこの前エレベーターのなかでも告げたように、会社に辞表を出したようだつた。退社までには手続きなどがあつてもう少し時間がかかるようだつたが、それでも十月のはじめ頃までには退社してしまうという話だつた。

主任のこともあるので、中島が会社を辞めてしまうのは仕方のないことだったが、しかし、池田は中島がもうすぐ会社からいなくなってしまうのだとと思うと、寂しい気持ちになった。考えてみれば、会社のなかで、音楽のことや、趣味のことについて話ができるのは彼女くらいのものだったのだ。他の人間とはそれほど話がかみ合わなかつた。

池田はふと会社のなかから自分の居場所がどんどん失われていつてしまつような、疎外感の混じつた、孤独感を覚えた。そんなふうに感じてしまつのは、この前の武田の話のせいもあるのかも知れなかつた。

池田はときどき、いま自分がどこに居て、どこに向かつて進もうとしているのか、上手把握できなくなつてしまつことがあつた。一体何が楽しくて、何のために生きているのか。ただ生活するために働く、淡々とした毎日だけがあるような気がした。そう考へると、池田の気持ちはひどくふさぎこむことになつた。まるで出口ない、細長い廊下に迷いこんでしまつたみたいに。

十月に入ると、何日が続けて激しい雨が降つた。その雨が上がつてしまつと、世界はいよいよ秋めいていった。大地を照らす日の光は透明度を増し、空気は澄んで、肌寒く感じられるようになつていつた。木々の葉も少しづつ色づきはじめ、道端にはとこりとこりで

木々の枯れ葉が田づくりになつた。

中島の送別会が催されたのは、中島が会社で働く最終日だつた。予定があつて出席できない人間も何人かいたが、池田の働く部署のほとんど全てのひとが参加することになつた。

仕事が終わつたあと、近くの居酒屋に移動して、中島が去つてしまつことをみんなで惜しんだ。

そのとき池田はたまたま中島の近くの席になつて、彼女と楽しく話しかけていたのだが、しばらくすると、酒を飲んで顔が赤くなつた主任がふらふらと池田と中島が話している席に割り込んできた。

「中島ちゃん、どうして辞めちゃうんだよ」

と、主任は中島のグラスに無理にビールを注ぎながら妙におどけた口調で言つた。

中島が主任の言葉に困つて曖昧に微笑んでいると、主任は池田の顔に視線を向けて、

「中島ちゃんが辞めるくらいなら、こいつが辞めつやあいいんだよ」と、主任は笑つて言つた。

池田は主任の科白に多少腹が立ちましたが、酔つているし、あつと冗談で言つているのだろうと思つて、そうですね、と、曖昧に笑つて話を合わせておいた。

「こいつなんて全然仕事できねえし、中島ちゃんの方が会社に居てくれた方が会社のためになるんだよ。な、中島ちゃんもそう思つだろ?」

「そんなことないですよ」

と、中島は主任の言葉に洟をなく笑つて答えた。

「池田さん仕事頑張つてゐるし、後輩の面倒見とかもいこし」

「そんなことねえで」

と、主任は笑つて中島の科白を否定した。

「こいつが優しいのは、口口イこと考へてるからなんだつて。そういうの？」

池田？」「

池田がどうリアクションしたらいいのかわからず困るけど、

「な、こいつ否定しねえだろ？」

と、主任は笑つて勝ち誇つたよつと語つた。

「だいたいこいつの田からしていやらしいんだよ」

と、主任は微笑して続けた。それから、主任は中島の方に向き直ると、

「それにしても中島ちゃんつて胸デカイよね？」

と、主任は中島の胸のあたりをまじまじと見つめて語つた。

「ちょっと一回でいいからさわらしてよ」

中島が困惑していると、主任は構わずに中島の胸に手を伸ばした。

「ちょっとやめてください」

中島は小さな声で抗議したが、主任は笑つて「最後にもう一回だけ」と言つて、また手を伸ばして中島の胸に触れよつとした。

「主任、それセクハラですよ」

と、池田はもう一度主任が中島の胸に触れよつとしたところで声

をあげた。しかし、主任は池田の声が聞こえなかつたのが、そのまま手を伸ばさうとする。

「ちよっと主任」

と、池田は今度は少し大きな声で注意した。それから、中島の胸に手を伸ばしかけた主任の手を軽く叩く。

主任はまさか池田に手を叩かれるとは思つていなかつたらしく、それまで浮かべていた笑みを消して、池田の顔をじっと見た。

「なんだよ、池田」

と、主任は池田の顔を見つめまま、齧るような口調で言った。主任は池田に注意されたことが気に食わなかつたようだつた。

「なにがセクハラだよ。お前、中島の彼氏じやねえだろ？」

「やひいつ問題じやないでしょ！」

と、池田は答えた。

「中島さんが嫌がつてるのがわからんのですか？」

「せんなかつこつけんなつて」

と、主任はバカにしたように小むく笑つて言った。

「中島さんの前でいいところ見せようたつて無駄だつて。中島さんはお前のことなんて絶対好きならねえし。誰かお前みたいなやつ

池田は主任の言つて草に腹が立つた。我慢しきつと思つたのだだが、今回はできやつになかつた。気がつくと、言つて返してしまつて

いる自分がいた。

「誰もそんなこと言つてないでしょ。だいたい誰のせいでも中島さんが会社辞めると思つてんですか？あなたのセクハラのせいですよ」

ちよつと池田さん、と、中島が小さな声で注意する声が聞こえたが、そのときは池田も頭に血が上つていて、自分の感情が抑えられなくなつていた。

「お前、誰に向かつて口きいてんだよ」

と、主任も池田の言葉に声をあらげた。

「あんたつて、あんたですよ。他に誰がいるんですか？」

本格的に雰囲気が緊迫したとしたところで、

「主任ーちよつといつちに来てくださいよ」

と、よく事情を知らない男の社員が主任に声をかけてきた。

主任は一度その社員の方を振り向くと、それからまた池田の方に向き直つて、池田の顔を睨みつけた。そして立ち上がり、何も言わずに、主任は声をかけてきた男の社員のもとへと歩いていった。

池田は去つていく主任の後ろ姿を無言で見送った。

それから、主任とは飲み会が終わるまで一言も口を聞かずにつわつた。

飲み会が終わると、池田は中島と帰る方向が同じだったので、途中まで一緒に帰ることにした。

他の社員と別れて、少し歩いたところで、「すみません。わたしのせいであんなことになっちゃって・・・」と、中島は心持顔を俯けて申し訳なさそうな口調で言った。

「そんな気にせんでもいいで」と、池田は軽く笑つて答えた。

「べつに中島さんが悪いわけやないんやし。だいたいあいつには前々からムカツいとつてん」

「でも、あんなこと言つちやたら、会社で働き辛くなりませんか?」と、中島は俯けていた顔をあげて池田の顔を見ると、心配そうな声で言つた。

「大丈夫やつて」

と、池田は微笑して答えた。

「ござとなつたら、会社辞めればいいだけの話やし。実際、最近転職しようかなつて思つてん」

「・・・そりなんですか?」

中島はどうか気遣わしげな表情で池田の顔を見た。

「それより、中島さんは」のあとどうするか決めてんの？会社辞めてから？」

池田は明るい表情を装つて、殊更に話題を変えて言つた。

中島はさつきの主任との件について、まだ何か言い足そうな表情を浮かべていたが、もう一度迷うように池田の顔を一瞥してから、

「一応決めています。東京に行こうかなって」

と、口元で弱く微笑んで答えた。

「東京に行くんや？」

と、池田は少し驚いて言つた。

「実は最近、彼氏が東京に行くなつて言い出して」

と、中島は池田のリアクションに曖昧に笑つていわけするよう続けた。

「わたしの彼氏、この前も話したと思うけど、もう一十七歳で、だから、もう一度最後に東京で頑張つてみようかなつて言い出してて。それでわたしもついていくかなつて」

「そうなんや」

と、池田は頷いた。

「でも、そういうのもいいかもな。大阪よりも東京の方が色々チャンスもありそうやしな」

「でも、わたしも彼氏も東京で具体的にどうするかとかまだ何も決めてないんですけどね」

と、中島は池田の顔を横目で見ると、自嘲気味に付け足して言つた。

た。

「結構アバウトやな」

と、池田は中島の笑顔につられてよつこにして少し笑った。

少し冷たい風が吹いて、近くの街路樹の葉を揺らした。オレンジ色の、温かみのある街灯の光が、ふたりが歩く通りを静かに照らしている。そんな静かな、淡い光のなかいると、何故か色々なものが色あせて、物悲しく見えた。

「そういえば」

と、しばらくの沈黙のあとで、中島が微かに口元を綻ばせて言った。

池田が中島の顔に注意を戻すと、
「こ」の前、彼氏に池田さんが褒めてつた言つたら、彼氏、すこく喜んでましたよ」と、中島は楽しそうな笑顔で言つた。

「一度、池田さんに会つてみたいって言つてました。池田さんも昔音楽やつてたことがあるんだって教えたらい、話が合つて」「俺の場合はただの趣味やけどな」と、池田は軽く笑つて答えた。

「そうだ、今度みんなで一緒にご飯食べません?」

と、中島は明るい声で勝手に話しを進めて言つた。

「ほら、こ」の前一緒にライブに来てた、なんでしたっけ?・・・いす、なんとかさん

「もしかして泉谷のこ」と?..

「そりゃ、泉谷さん。その泉谷さんとか誘つて。わたし、もう会社辞めちゃったし、だから時間なら結構あるし、彼氏もバイトだから、時間合わせられると思うし。それでいつかふたりが都合のいい日にでも」

「べつにいいけどな」

なんだか妙な展開になつてきたなと可笑しくなりながら池田は承諾した。

「やつた！」

と、中島は嬉しそうにほしゃいだ声を出した。

「わたし、池田さんの友達と一度話してみたかったんですね。なんか面白そうなひとだったし。あのひと、名前忘れちゃったけど、お笑い芸人の誰かに似てますよね？」

池田がそのお笑い芸人の名前を告げると、中島はそのひとそのひと言つて、可笑しそうに笑つた。

「でも、あいつは顔が似てるだけで、あんま面白くないで」

と、池田は中島に一応忠告しておいた。

「今日は月がきれいですね」

と、中島は唐突に歩みを止めると、夜空を見上げて言った。池田が中島につられてるようにして夜空を見上げてみると、そこには、月が、冷たく澄んだ光をそつと放っていた。

予想していたことではあつたが、主任の池田に対する風当たりは強くなつていった。以前からそういう傾向はあつたのだが、この前の飲み会の席での一件以来、その傾向はますます顕著になつていつた。ときには嫌がらせ以外の何物でもないと思えるようなことまでされるようになつた。

池田が自分のデスクで仕事をしていると、主任の机の前まで呼び出されて、どうでもいいようなことで大声罵らせた。適正がないからやめろ、と、まで言われた。また面倒な仕事は全部池田に押し付けられだし、何かミスがあると池田のせいにされた。

池田の会社は一応週休二日制になつてているのだが、休日は決まって主任に何か仕事を頼まれて休日出勤しなければならなかつた。

何人かの同僚は池田に同情してくれたし、慰めの言葉もかけてくれたが、しかし、だからといって、池田の弁護までしてくれるわけではなかつた。もし、主任に逆らえば、今度は自分が標的にされることがわかりきつているからだ。

主任のせいで池田はストレスがたまり、ときには気分が悪くなつて、胃液を吐くことがあるくらいだつたが、しかし、ここで辞表を出したりしたら、それこそ主任の思うツボだと思って、どうにか我慢した。主任の嫌がらせなんかに負けてたまるか、と、池田は意地になつっていた。

田々は駆け足で過ぎて行き、十月も後半に入ると、秋の記しが色んなところで見られるようになつていった。木々の葉は美しい紅に色づき、通りには金木犀の甘酸っぱいような香りが漂つになつた。

街を照らす日の光はますます透明度を増し、そんな淡い光のなかで、世界は少しずつその色素を失っていくようだつた。心なしか、空の色まで、夏の頃に比べると、半透明の淡いブルーに変わつた気がした。耳を澄ませば、今どつかりと腰を下ろしている秋の背後に、冬の、微かな足音が聞こえるような気さえした。

泉谷太陽から電話があつたのは、土曜日の夜だつた。電話の内容は、ちよつと話したいことがあるので、もし日曜日暇だつたら、一緒にご飯でも食べにいかないかというものだつた。池田はどうかにか日曜日は時間を作ることができそうだったので、夕方の六時に難波で待ち合わせをしようと言つて、電話を切つた。そういうば、中島が今度一緒に食事に行きたいと言つていたし、そのことを伝えるのにも機会だと池田は思つた。

「池ちゃん、ちよつとやつれたんやつ?」

待ち合わせ場所に現れた泉谷は、池田の顔を見ると、軽く笑つて指摘した。

「いや、最近ちょっと仕事が忙しくてな、あんま食べてないねん」

池田は友人の指摘に、口元で少しきこちなく笑つて誤魔化すように答えた。おそらくやつれてしまつたのは、ストレスのせいで食欲がこのところなかつたせいだらうと池田は思つたが、しかし、そのことは黙つてしていることにした。ストレスのせいで食欲がなかつたなんて格好が悪くて告げる気にならなかつた。

池田が、この前の送別会のときに、中島が一度泉谷も交えて食事に行きたいと言つていたことを伝えると、泉谷は意外な展開に戸惑いながらも、基本的に土日であれば問題ないと中島の誘いを承諾してくれた。

それから、ふたりは通りをしばらく歩いて、最近できばかりのパブに入った。

店に入ると、ふたりはどうぞいらっしゃいとおえずといつ感じでビールを注文した。

程なくして運ばれてきたビールとつまみを口にしながら、池田と泉谷はなんでもないような世間話をした。泉谷の明るい笑い声を聞いてみると、池田はこのところふわわーこんでいた心が、少しだけ解きほぐされていくよつた気がした。

「でも、なんか今日、池ちゃん、元氣ないよな？」

一通り話題が尽きたところで、泉谷が一杯目のビールを口元に運びながら言つた。

「いや、べつにそんなこともないで」

と、池田は泉谷の言葉に、口元で弱く微笑んで否定した。

「・・・あれから、彼女とは上手くいってんの？」

池田は泉谷の問いに首を振った。優貴とはもう一ヶ月半近く連絡を取りていなかつた。最初の頃は優貴のことを思い出すと、辛い気持ちになることもあつたが、最近は仕事が忙しいのと、主任とのことで、優貴のことを思に出すことは少なくなつていた。

風呂に入つてゐるときなどにふい思い出して、哀しい気持ちになることがないわけではなかつたが、しかし、最近ではすっかり諦めの気持ちに変わっていた。もう、今更彼女の気持ちを繋ぎとめようとか、そういう気力は失われてしまつていた。

「実はあれから全然連絡とつてないねん」

と、池田は苦笑するように笑つて少し弱い声で答えた。

「やうなんや」

と、泉谷は池田の顔をじこか気遣わしげな表情で見ると、どんな表情を浮かべたらいいのかわからないといつたように、曖昧な笑みを浮かべた。

「もう諦めたんや？」

「まあな」

と、池田は眼差しを伏せて口元で少し笑つた。

「いつまでも待つてもしゃあないしな」

「・・・そつか。それやつたらいいんやけど」

泉谷は池田の科白に元に淀むよつてかいで一田畠葉を区切ると、少し躊躇つてから、

「いや、実はな」

と、泉谷は言つた。

「「」の前の土曜日、俺、池ちゃんの彼女、見かけてん

池田は、泉谷の言葉に、それまで俯けていた顔をあげて、泉谷の顔を見つめた。泉谷は何度か池田も交えて優貴と出かけたことががあるので優貴の顔は知っている。

池田が黙っていると、泉谷は言葉を続けて言った。

「この前な、彼女と一緒に買い物にいつてんけどな、そのときこ、見かけてん。池ちゃんの彼女。遠くから見かけただけやから、もしかしたら見間違いかもしれへんけど、でも、たぶんあれは池ちゃんの彼女やったと思うで。誰か知らん男のひとと一緒に歩いとった」

「そうなんや」

と、池田は相槌を打つた。何をどう言つたらいいのかわからなかつた。そんなことじやないだろうかと覚悟はしていたつもりだったが、泉谷の口から改めてそう聞かされると、池田はやはりショックが大きかつた。

「「」のことを言おつかどうか迷つてんけどな」

と、池田が言葉を見つけられずにいると、泉谷はいいわけするよう付け足して言つた。

「でも、一応言つておいたほうがいいと思つてな」

池田は泉谷の科白に黙つて頷いた。

「まあ、もしかしたら、俺の見間違いかもしれへんけどな」と、泉谷は励ますように微笑して言つた。

「いや、でも、たぶん、見間違いじゃないと思つて」

と、池田は少し間をあけてから、なんでもないふうを装つて言った。池田としては友人に心配されたくないかった。

「これで色んなことがはつきりするもんな。突然彼女が別れたいって言い出したのも、連絡がつかへんかったのも、

池田は一皿そこまで言葉を区切ると、泉谷の顔を見て、

「でもまあ、これで良かつたんかもな、色々はつきりしたし」

池田は力なく笑つて言つた。泉谷は池田に誘われるようにして口元を曖昧に笑みの形に変えると、少し間をあけてから、

「でもまたそのうちこいつことであるで」

と、慰めてくれた。

「やうやな

と、池田は頷いて軽く笑つた。それから、池田は心のなからせり上がりてくる感情を無理に押さえ込むよつて、グラスに残っていたビールを一息に飲み干した。

21

それでも明日はやつてくれる。たとえどんなに明日とこいつがやつてくれる」とを望んでいなくても。

仕事を終えアパートに帰宅し、風呂に入り、ぐつたりと疲れきった状態でベッドに入る。ベッドに入つて瞼を閉じるとき、池田はふと暗い気持ちになる。もう明日といつ日なんてやってこなくてもいいかなと。ただこのままずっと静かに眠つていいと。それでも、当たり前のことはあるが、そんな池田の意志とは無関係に、夜が明ければ、また新しい一日がはじまる。

ちょっと大袈裟かもしれないが、自分にとって会社での時間は、水中のなかでずっと息を止めているみたいだ、と、池田は最近感じることがあった。

中島の送別会からもう一週間以上が経過したが、一向に主任の池田に対する態度は変わらなかつた。面倒な仕事は押しつけられるし、何かミスをすれば、必要以上に嫌味を言われた。池田は一体自分は何のためにこんな毎日を我慢しているのだろうとしばしば思うようになつた。

決して今の仕事が嫌いなわけではないが、かといって、どうしてもこの仕事を続けてきたいと思っているわけではない。会社のなかに特別親しい人間がいるわけでもない。いつそ今の会社を辞めてしまおうか。池田は何度となくそんな思いに駆られる。

でも、と、池田は一方で思つ。もし、ここで自分が会社を辞めたりしたら、それこそ主任とつて都合の良い結果になるだけなんじゃないのか。池田はたとえどんなことがあっても、主任を喜ばせてやるようなことはしたくなかった。

でも、じゃあどうすればいいのだろう。このままずっと主任の嫌がらせを耐え忍んでいくしかないのだろうか。

池田は確かに答えを見つけられなかつた。見つけられないままに、必要以上に心は落ち込んでいった。

そんなふうに気持ちが沈んでしまつのは、この前泉谷から話を聞いたせいもあるのかもしかつた。街で優貴を見かけたという話。

あれから池田は泉谷と別れて自分のアパートに戻ったあと、ケータイのアドレスから優貴の連絡先を削除した。そうすることで、未練の気持ちを断ち切ろうとしたのだが、結果はかえって、惨めな喪失感が深まつただけだった。

まだ根っここの部分には優貴に対する想いがどうしようもなく残っていたし、それは池田の心に眠っている様々な暗い思いを呼び寄せて、たださえ疲労している池田の心を余計に暗い場所へと追い詰めていった。

22

その日、アパートに帰り着いたのは、夜の十一時を過ぎていた。仕事がなかなか片付かなくて帰るのがいつもよりも遅くなってしまったのだ。

明日は明日でまた仕事がある。八時には会社に着いていなければならぬので、遅くとも朝の六時半には起きなければならない。

これから風呂に入つて、ご飯を食べて、テレビを見たりしていたら、もうすぐに一時過ぎだ。何も自分のやりたいことをやる時間がない・・・そして、また明日、あの主任の顔を見なければならぬのか。

そのとき、ふいに、池田の中に、自分でも上手く説明のつかない、色んな感情がじちゃまぜになつた、激しい苛立ちのようなものがこみ上げてきた。一瞬、色々なことが忌々しくなつた。仕事のことも、優貴のことも、将来のことも、生活のことも、なにもかも。

もう何もかもが嫌だと、池田は思った。全て投げ出してしまったい、と、自棄になった。それが大袈裟な感情であることはわかつていたが、しかし、池田はそんな発作にも似た感情をどうすることもできなかつた。

ソファーに座つてしばらく時間をおくことで、さつきまでの突發的な感情の高まりはいくから收まつたものの、池田は何もする気になれなかつた。風呂に入るのも、これから食事をするのも、眠るのも、全て億劫に感じた。ただ何もかもが面倒だつた。面倒というよりは哀しいのかもしかなかつた。自分という存在を消し去つてしまいたいと思つた。

十五分か、二十分、そうしてソファーでぼんやりと自分の感情の流れに身を任せていたあとで、池田はふと久しぶりにあそこへと行つてみようと思い立つた。池田はその場所のことが無性に懐かしくなつた。

その場所のことを、池田たちは昔から「星見」と呼んで親しんでいた。「星見」というのは、べつに星が綺麗に見える場所のことではない。大阪郊外にある、夜景が見える場所のことだ。

その場所は、池田が普通つていた大学の近くにあつて、あまりひとに知られていない。池田が大学のあたりを車で走つているときには偶然見つけて、いつしか池田の友達みんなでときどき通うようになつたのだ。

何故その場所のことを「星見」と呼ぶようになったのかはわからぬ。徹夜明けの朝にみんなで車でその場所に出かけて、そこから

見える星空が綺麗だつたことから、太陽がそう呼んで、いつの間にかそれがみんなに浸透したような気がするが、でも、そんな気がするだけで、実際はそうではないのかもしない。池田の記憶は曖昧だった。

ただ池田のなかでその場所は特別な場所だった。大学生のときも、何か上手くいかないことがあつて落ち込んだりすることがあると、池田はひとりでよくその場所に通つたものだった。

池田はアパートから外に出ると、駐車場まで歩き、自分の車に乗つた。そして池田の今住んでいる場所から片道一時間程かかる「星見」を指した。「星見」に行つて帰つてくると、眠るのは深夜の一時を過ぎてしまつことになるが、そのとき池田はもうビリでもいいうな投げやりな気持ちになつっていた。

23

もう夜の十一時を過ぎてゐるといつてもあつて、車道に車の数は少なく、予想していたよりもずっと短い時間で目的の場所に辿り着くことができた。

池田は道端の隅に寄せて車を駐車すると、車を降りた。

「星見」さかつとした山のつねにあるので、空気はひんやりとして肌寒い。まるでその場所だけ、一ヶ月ほど早く季節が進んでいるかのようだ。もう少し厚着をしてくればよかつたな、と、池田は軽く後悔した。

少し歩いて、展望台のつねに上がる。展望台といつても、観光地

にあるような立派なものがあるわけではなく、木材で間に合わせで作った、ちょっと大きめのベランダのようなものが備えつけてあるだけだ。

池田は展望台に上ると、歩いていつて、手すりにもたれかかり、そこから見える大阪の街の光をぼんやりと眺めた。

オレンジ色がかつた、淡い光が遠くに見える。瞳のなかから池田の心に沈みこんだいくつもの光の欠片は、池田の心を微かに震わせていった。

一瞬、池田のなかで何かが大きく膨張して、またもとに戻るような感覚があった。

最後にこの場所に来たのはいつのことだろ?と池田は思い返した。あれはたぶん、大学を卒業してすぐのことだと池田は思い出した。卒業式の何日か後に大学の親しい友達にみんなで集まって飲んで、それでそのあとにみんなでこの場所に来たのだ。確か。

あの頃から比べて、自分は少しでも成長できたのかな、と、池田はふと思つた。少しでも前に進むことができただろうか。

たぶん、答えはノーだ。あの頃持つていた希望や、可能性を失つてしまつたという意味では、むしろ逆に後退してしまつたといえるのかも知れない。

結構自分なりに努力してきたつもりだつたんだけどな、と、池田は心のなかで力なく笑つた。でも、それはたぶん、ただのつもりだつたのだろう。まだまだ努力が足りなかつたのだ。時間だけが・・・。そう、時間だけが、ただ流れすぎていつてしまつたんだな、と、池

田は心のなかから何かが零れ落ちていくよつと思つた。

池田は何かを閉じ込めるよつと強く瞼を閉じた。そうして、しばらへあいだそのまままでいてから、閉じていた瞼をゆつくりと開いた。

それにしても、生きていいくことはなんて難しいんだろう、と、池田は今更のように痛感した。自分はべつに有名になりたいわけでも、お金持ちになりたいわけでもない。ただ、ささやかな自分がだけの居場所が欲しいだけだ。

だけど・・・。

いや、でも、そんなふうに今の自分の状況を嘆くのはただの甘えかもしねりない。世の中には自分なんかよりもっと過酷な状況に置かれているひとたちだっているのだから。なにをこれくらいのことでも自分はくよくよしているのだろう。しつかりしろよ、と、池田は心のなかで自分を叱咤した。でも、そうしても、心に上手く力は入らなかつた。心はいつの間にか冷えて硬く強張つてしまつていた。

池田は改めて遠くに見える街の光を眺めた。じつと見ていると、その美しい光の集まりは懸命に池田に何かを伝えよつとしているようにも見えた。でも、池田には光が一体自分に何を語りかけようとしているのか、どれだけ耳を澄ませてみても聞き取ることはできなかつた。

ただ聞こえるのは、耳元を吹きすぎていく少し冷たい風の音だけだつた。

泉谷も交えて中島と食事に行く日は、十一月最初の土曜日に決まつた。池田がそのくらいであれば時間を作ることができそつだと中島にメールを送ると、じゃあその日にしましょと中島から承諾の返事が帰ってきたのだ。

池田は泉谷とは家が近所なので一緒に電車に乗って出かけ、待ち合わせ場所の梅田駅で、中島とその彼氏と合流した。

中島の彼氏と顔を合わせるのははじめてなので、池田も泉谷も少し緊張しながらお互いに自己紹介を交わした。中島の彼氏の名前は、寺岡琢磨といい、その一見怖そうな外見とは対照的に話しやすく明るい雰囲気で、すぐに打ち解けた仲になつた。

どこに食べに行こうかと四人は梅田駅周辺を転々としたあげく、最終的に食べ放題の焼肉屋を見つけて、そこに入ることにした。

さすがに休日の夜ということもあって店は混雑していたが、それほど待たされることもなく、四人は席に通された。

席につくと、程なくして注文を取りに来た店員に、四人は焼肉の食べ放題のコースを注文し、それから各自好きな酒を頼んだ。

オーダした酒はすぐに運ばれてきて、四人は乾杯してからお互い

の近況を報告し合つた。

聞いたところでは、中島たちふたりはもう既に東京に住むといふを決めてきたという話だつた。

「いつ間に決めてきたん？」

と、池田がいささか驚いて尋ねると、中島は小さく笑つて、

「会社辞めたあとすぐですね」

と、答えた。

「いつこりの早く行動した方がいいだろ」と思つて

「でも、新しく何かをはじめるのつていいよな

と、泉谷はまるで自分が新しい生活をはじめるかのようなうきつきとした口調で言つた。

「そうですね」

と、中島は泉谷の科白に微笑して相槌を打つた。

「色々不安な」ともあるけど、でも、いまは楽しみな」との方が多いかな」

「東京に行こうって言つて言つ出したのは俺の方なのに、なんかコイツの方が妙に張り切つちゃつてるんスよね」

と、中島の隣に腰を下ろしている寺岡が苦笑するように笑つて言った。

「新しい仕事さきとかは決まつてんの？」

と、池田がふと氣になつて尋ねてみると、中島は頭を振つた。

「まだ何も。でも、最初はバイトでいいかなつて。この前決めてきたアパートも家賃五万円くらいでそんなに高くないし、彼氏もバイトするつて言つてるし、家賃も折半すれば半額になるし。だからなんとかなりそつかなつて。貯金もちょっとだつたらあるし

「そつか。ちゃんと色々考へてるんやな」

「一応は」

中島は池田の科白に小さく笑つて頷いた。

「まあ、ほんまは養つてほしいんスけどね」と、寺岡が冗談めかして言つた、

「はあ？ 何言つてるのよ。あんた」

中島に一蹴された。

そんなふたりのやりとりに誘われるよつにして池田も泉谷も少し笑つた。

と、ちよつぢやのじりじり、四人が注文した焼肉用の肉がテーブルのうえに運ばれてきた。それからじばらくはみんな焼肉を食べるのに夢中になつて口数も少なくなつた。

ある程度腹が膨れたところで、

「でも、ほんまにこの前のライブ、すごい良かつたですよ」

と、池田は自分の向かいの席に座つている寺岡に向かつて感想を述べた。

「あれやつたらほんまにプロになれそがかも」

池田の科白に、寺岡は照れ臭そうに笑つた。

「そんなんふうに言つてくれるなんて、池田さんいいひとですね」

「いや、お世辞とかじやなくて、ほんまに」

「東京にはバンドのメンバーみんなでいくんですか？」
と、それまで黙つていた泉谷が途中で口を挟んだ。

その泉谷の問いに、寺岡は若干表情を曇らせて首を振つた。

「いや、東京に行くのは自分だけですね」

と、寺岡は田線を落として、残り僅かになつたビールを口元に運びながら答えた。

「実はバンド解散しちゃつたんですよ」と、寺岡は苦笑して言葉を続けた。

「ここの前まで組んでたバンドのメンバーってみんな同じ年くらいなんスけど、みんな二十六とか、ハとかそれくらいで…それでみんななかなか結果出せないから、そろそろいい年だし、バンド辞めようつてこいつ話なつてて」

でも、まだ俺はまだ諦めたくなくて…つていうか、未練があるて、だから、そういうのもあって、今回東京に行くことにしたんスけどね。最後に、もう一回だけあがいてみようかなつて。無駄かもされませんけど」

寺岡はそこまで話すと、それまで俯けていた顔をあげて泉谷の顔を見ると、困ったように曖昧に少し笑つた。

「そつか。でも、確かに色々悩みますよね」と、泉谷は寺岡の言葉が予想外だつたようだ、いくつらか気遣わしげな表情で言った。

「…なんでなんスかね。寺岡さんたちのバンドやつたら、普通にプロとしても通用しそうな気がするんですけどね」

寺岡は泉谷の発言に口元で力なく笑つた。

「そう言ってもらえてすごく嬉しいです…俺も、自分の演奏とか曲にはある程度自信あるつもりなんスけどね…でも、まあ、どうしようもないですからね。こいつのつて巡り合わせだから…それに、こんなこと思つてるやつらなんて一杯いるんだろつし」

寺岡はそのままで言葉を区切ると、
「でも、とりあえず、東京でやれるといいまでやつてみます。俺、
いま一十七だから、三十歳くらいこまでは。それでもしだめだつたら、
また考えます」

寺岡はそう言って笑顔を浮かべた。

つられるようにして池田は微笑むと、
「東京行つたら、意外とすぐ結果だせるかもしれませんよ。今のう
ちにサインもらつとこうかな」「
と、冗談めかして言った。

「あ、俺もお願ひします」

と、池田の言葉に、泉谷も続いた。

「ふたりとも気が早いすぎです」

と、寺岡はそう言って可笑しそうに笑うと、顔の前で手を振った。

それから、じぱりくのあいだは音楽談義になつた。高校のときによ
りんな音楽を聞いていたかとか、好きな曲について。

一通り音楽に関する話題がつきたところで、

「東京にはいつぐらいに発つつもりなん?」

と、池田は一枚だけ余つていた肉を皿のうえに運びながら中島に尋ねてみた。すると、中島は、

「一応、十一月の頭を予定してます」

と、短く答えた。

「一応、日曜日なんで、もし暇だつたら、見送りきてくださいよ。
寂しいんで」

と、中島はいたずらっぽく笑つて言った。

「自分で言つなつて」

と、中島のとなりで寺岡が笑つて突っ込みを入れた。
つられるようにして池田は軽く笑うと、

「でも、ほんまに時間あつたらいくわ」

と、池田は微笑して言った。

「中島たちには頑張つてもういたいしいな」

「ほんとですか！？」

中島は池田の発言にほんとうに嬉しそうな笑顔で言った。

「ほんじや、俺も行こうかな」

と、泉谷が池田のあとから遠慮がちな声で言った。

「なんか賑やかな出発になりそうですね」

と、寺岡は微笑んで言った。

25

中島たちと別れたあと、池田はまた泉谷と一緒に電車に乗つて帰つた。

途中まで方向は同じなので、池田はアパートまでの帰り道を泉谷と一緒に並んで歩いた。もう午前零時近くになつた街に人影は少なかつた。肌寒いせいか、街を彩つている街灯の光は妙に暖かく、しんみりとして感じられる。

「でも、ふたりにはほんとに頑張つてもういたいよな

と、池田は歩きながら、今日中島たちと交わした会話をふと思い出して泉谷に話しかけた。

「やうやなあ」

と、泉谷は池田の科白に曖昧な笑みを浮かべて静かに頷いた。

思い出したように少し強い風が吹きぬけていた。十一月に入つていよいよ風も本格的に冷たくなつてきた。どこか近くの空き地で鳴いているらしい虫の鳴き声が、風がふきすぎていつたあとに静けさを引きたてるように聞こえた。

「でも、あれやな」

と、少しの沈黙のあとで、泉谷は池田の方を振り向くと言つた。
「今日、中島さんの彼氏も言つとつたけど、やっぱ、俺らくらいの年齢になると、それまで目指したものとかみんな諦めていつしまうよなあ」

もう言つた泉谷の口元に浮かんでいる微笑は、どこか寂しそうにも映つた。

「まあ、年齢的などとか色々あるし、ある程度仕方のない」となんやううけどな

泉谷は池田が黙つてゐると、自分に言い聞かせるようにうつ続けた。

池田は泉谷の科白に耳を傾けながら、つい最近故郷に帰つていた友人のことを少し、考えた。彼は今頃どうしているのだろうと池田は思つた。

「でも、なんか嫌やな」

泉谷は話しつづけた。

「いつも間にか現実なんてこんなものやつて諦めるのが当たり前みたいになつてるみたいで」

太陽は微笑して言つた。

「これからさきの未来にい」となんて何もな「うな気がしてしまうやん」

「確かに」

池田は曖昧に微笑して頷いた。確かに泉谷の言つとおり、いつの間にか気がつかないうちに、何かを諦めることが、上手くいかない現実を受け入れることが、当たり前のことになつてしまつているような気がした。どうすれば傷つかずにつむか、失敗せずにいられるか、そんなことばかり考えている自分がいるようで池田は嫌になつた。

「でも、だから余計に」

と、泉谷は少し感覚をあけてから微笑んで言葉を続けた。
「中島さんたちには頑張つて欲しいよな。俺らとは違つて、前に向かつて進んでいって欲しいと思うよな」

そう言つた泉谷の声は、どこか願つよつとも響いた。

ふと、何気なく目線あげると、そこは月が見えた。月は半透明の淡い銀色のひかりをこちらに向かつてやわらかく投げかけていた。それは日に冷たいような光だつた。池田はまるで雨降りを確認するときのようにそつと手を差し出すと、舞い降りてくる月の光を掌に受けてみた。すると、掌に一瞬微かな温もりが伝わつて、でも、それは雪が溶けるようにすぐ消えた。

十一月の半ばから後半にかけてばたばたと色々なことが起つた。まず池田は三ヶ月ぶりくらいに優貴と再会した。それから、池田はこれまで勤めていた会社を辞めることにした。

池田が優貴の姿を偶然見かけたのは、外回りの営業を終えて、会社に向かって帰っている途中だった。

会社に向かって歩いていると、池田は反対側の通りに見覚えのある女の顔を見かけた。それは優貴だった。一瞬、見間違いかなもしれないと思ったのだが、しかし、それは間違いなく優貴だった。通りを挟んだ向かい側にはカフェがあつて、彼女はいまそのカフェに入ろうとしているところだった。

咄嗟に、池田は「優貴！」と彼女の名前を叫びそうになった。もしかしたらこれまで彼女が連絡をくれなかつたのは何らかの事情があつたのかもしれない、と、池田は思った。考えてみれば自分もう長いあいだ彼女に連絡をしていなし、彼女の方でも自分が連絡してきてくれるのを待っていたのかもしれない、と、ふとそんな考えが浮かんだ。

話してみれば、意外と彼女は今まで自分のことを好きでいてくれるんじゃないか。自分のことを必要としてくれているんじゃないか。池田のなかで突然的に彼女に対する未練の気持ちが強まって、つい池田はそんなふうに自分にとって都合の良いように解釈してしまった。すがるようになにそんなことを思つてしまつた。

だから、池田は「優貴！」と、彼女の名前を叫びかけた。でも、池田が彼女の名前を呼びかけたまさにその瞬間に、彼女はにつこりと微笑んで、後ろを振り返つた。すると、そこには池田の知らない若い男がいた。まるで安っぽいドラマのワンシーンみたいに。ほんとにこんな偶然が起つことがあるんだ、と、池田は啞然とした気持ちになつた。

池田は開きかけていた口を閉じ、優貴とその自分の知らない男がカフェに入つていくのを黙つて見送つた。優貴は全く池田の存在には気がつかなかつた様子だつた。

やがて、ふたりの姿が完全にカフェのなかに消えてしまつと、池田は再びゆつくりと歩き出した。歩きながら、池田は思った。この前泉谷が話していたことはやっぱりほんとうだつたんだな、と。自分が知らないうちに彼女に裏切られていたのだ。

でも、不思議と腹は立たなかつた。自分だつてもし状況が違えば彼女と同じようなことをしていたのかもしれないと思つた。彼女のこと責める気持ちは起きなかつた。

ただ、池田は少し悲しいだけだつた。誰も自分のことを愛していくれるひとはないんだな、と、思うと、心から温度が消えていくようになってしまった。

吹き付ける風がやけに冷たく感じられた。

27

気がついたときには池田は主任を殴り飛ばしてしまつていた。殴られた就任は派手な音をたてて座つていた椅子」と後ろに転倒した。やがて立ち上がつた主任は殴られた口元を手でかばいながら池田のことを口汚く罵つた。こんなことをしてどうなるかわかっているんだろうな、と、声高に主任は叫んだ。

池田は小さな声でわかつています、と、答えた。もうあなたの顔なんて一度と見たくないんだ、と、池田は言った。

その日、池田と主任はたまたまオフィスにふたりにきりになつた。池田が自分の机で残業をしていると、どこかに出かけていたらしい主任が、池田ひとりしかないオフィスに戻ってきたのだ。

早く帰ればいいものを、その日主任はなかなか帰ろうとはしなかつた。珍しく残業でもしているのか、自分の机で何か作業をしていた。そして案の定、しばらくすると、主任は池田に声をかけてきた。

またはじまつたか、と、池田はうなざりした気持ちで思つた。このひとは一日一回は自分に対して何か嫌味を言わなければ気がすまないのだろうか、と、池田は心のなかでため息をついた。

話があるからこいつによ、と、主任は言った。それで池田はそれまで座っていた椅子から立ち上がり、主任のデスクの前まで歩いていった。

池田が歩いていくと、主任は俯けていた顔をあけで池田の顔を見た。そして自分の机の上を指し示して、

「これ、何かわかる?」

と、訊いてきた。

見てみると、主任の机のうえには何かの資料のよつなものが置かれている。

「なんですか?」

と、池田が逆に尋ねてみると、主任はどこか池田のことをバカにしたような小さな笑みを浮かべて、

「今年の売り上げを書いた紙だよ」

と、告げた。

池田がどう言つたらいいのかわからず黙つていると、

「今年は売り上げが下がってんだよ」

と、主任は言葉を続けた。

「さつきも部長に呼ばれてそのことでも叱られてたんだよ。一体どうなつてるんだつても、

池田は答えようがなかつたので何も言わなかつた。

「なんでだと思つ?」

と、主任はわずかに間をおいてから尋ねてきた。

「なんで売り上げが下がったと思う？」

池田はわからなかつたので、わからない、と、答えた。池田は言われた仕事をこなしてこるだけなので、経営のことはまではわからなかつた。

「お前のせいだよ」

と、しばらく間をおいてから主任は言つた。

「お前がトロトロ仕事してんのが悪いことなんだよ」

と、主任は決めてつけて言つた。

「だいたいいつもなんでお前だけこんな遅くまで仕事してんの？他のみんなは帰つてんのさ」

それはお前が色んな仕事を俺に押し付けてくるせいだろうが、と、池田は憤りを感じたが、しかし、我慢して何も言わなかつた。すみません、と、ただ謝つた。

「すみませんじゃねえよ！」

と、主任はいくらか激昂して言つた。そして持つていたボールペンを池田の顔に向かつて投げつた。

「なんで俺が部長に怒られなきゃいけねえんだよ」

主任は顔を赤くしてそう怒鳴つた。

「だいたいお前の顔を見ると、イライラしていくんだよ。仕事できねえし。使えなねえし。愛想悪いしさ。・・・ほんと、この前、中島さんじやなくて、お前が辞めりやあ良かつたんだよ」

無茶苦茶な言われようだつたが、池田は主任の言つていることといちいち腹を立ててもじょがなことと思つた。好きなようだと言えばいいと思つた。

「お前や、今度辞表出して、代わりに中島さん連れ戻してきてよ。

お前中島さんと仲いいんだる?」

主任は冗談のつもりなのか口元に笑みを浮かべて言つた。

池田はどういふべきかわからなかつたので黙つていた。

しばらくの沈黙があつた。

「中島さん、今度東京に行くからしげじやん?」

いくらかの沈黙のあとで、主任はどうやらそんな情報仕入れてきたのか口を開くと言つた。

池田が否定も肯定もせずにいる、

「なんでも付き合つてる彼氏と一緒にいくらしげじやん。中島さんの彼氏、バンドやつてるんだって?」

と、どこかバカにしたような笑みを浮かべて主任は続けた。

「中島さんはもうひょっと頭のいい子だと思つたんだけどなあ」

主任は薄ら笑い浮かべて楽しそうな口調で言つた。

「なんでそんなヤツと付き合つてんだろ。東京でバンドなんかやつたつて結果は目に見えてんのに。プロになんてなれるわけねえじゃん。青春ごっこもいい加減にしろよな。身の程をわきまえろつづつの。何がバンドだよ。バカじやねえの」

主任のその科白を聞いた瞬間、池田のなかでそれまで堪えていた何かが弾け飛んだ。池田は許せなかつた。友人をバカにされたことが。友人がそれまで目指してきたものを、大切にしてきたものを、頭ごなしに否定されたことが。お前に一体何がわかるというのだと池田は思つた。

友人たちだつて何も考へていなかわけじやないのだ。なかなか思
い通りにいかない現実のなかで彼らなりに必死に前に進もうとして
いるのだ。していただ。お前に何がわかるつていうんだ！

気がついたとき、池田は主任の顔を思いつきり殴り飛ばしていた。
殴られた主任は座つていた椅子ごと派手に転んだ。

やがて身体を起こした主任はまさか殴られるとは思つていなかつ
たのか、その顔に一瞬怯えたような表情を浮かべたが、すぐに口汚
く池田のことを罵り始めた。俺にこんなことをしてただですむと思
つてゐるのか、と、主任は怒鳴つた。社長に頼んで、お前なんか首に
してやるからな、と、主任は脅した。

首か、と、池田は顔を赤くしてわめきたてる主任の顔を見ながら
妙に冷静な気持ちで思つた。首で結構だと池田は思つた。もう、あ
んたの顔なんて一度とみたくないんだ、と、池田は心のなかで吐き
捨てるよつに思つた。

そして、まだ何かを叫び続けている主任に池田は背を向けると、
自分の荷物をまとめて、そのままオフィスをあとにした。まだやり
かけの仕事が残つていたが、そんなことは知つたことか、と、開き
直つた。主任が残つて続きをやればいいのだ。

オフィスを去ろうとしている池田の背後で、主任はまだ何かを叫
び続けていたが、しかし、池田は構わずに歩き続けた。

中島とその彼氏を見送りに行く田、空は晴れ渡った。

空にはまるで冬の冷たさを取り込んだような透き通ったきれいな青空が見えた。空には小さな雲がぽつんぽつんとどこかのんびりとした表情で浮かんでいる。

池田は約束通り中島たちふたりの見送りに行くこととした。見送りには泉谷も一緒にきてきた。

駅に見送りにきているのは池田たちだけではないようで、中島とその彼氏の知り合いらしいひとたちの姿も幾人か見受けられた。

「池田さんたちほんとにきててくれたんですね」

と、中島は池田の顔を見ると、じつこりと微笑んで言った。

「今日はたまたま暇やったしな」

池田は微笑して答えた。池田は中島には会社を辞めたことは伏せておくことにした。もし池田が会社を辞めてしまったことを知つたら、彼女はきっと自分のせいだと責任を感じるだらうと思つたからだ。池田は彼女に余計な心配をかけたくなかつた。

あの日、主任を殴つた日の翌日、池田は部長に呼び出された。池田はそのまま会社を辞めるつもりで辞表を持っていていたのだが、

それよりもさきに解雇されることになるのが、と、池田は自嘲気味に思った。でも、まあいいか、と、池田は思い直した。そのぶん手間が省けて良いかもしない。

池田が部長の部屋のドアを軽くノックすると、ドアの向こう側から返事があって、入室を促された。

部屋に入ると、池田は部長が口を開く前に、黙つて、辞表を書いた紙を差し出した。部長はそれを受け取ると、中身を確かめて、それをテーブルの上に戻した。

「さみは会社を辞めるつもりなのか」「と、部長は池田の顔を見ると言つた。

池田は、はい、と、頷いた。

「話は聞いてるよ」「

と、部長はしばらく間をおこしてから言つた。

「すみません」

と、池田は頭を下げた。やはり主任は昨日のことでもう既に話していたのか、と、池田は半ば呆れながら思つた。

「あのときは頭に血が上つてしまつて……でも

部長は片手をあげて池田の言葉を遮つた。

「弁解はしてなくてもいいよ。暴力を振るうのは良くないことだが、でも、どうせあいつがきっとまたねくでもないことを口にしたんだ」「う」

部長はまじめに言葉を区切ると、何かを考えるように眼差しをテーブルの上に落とした。

「こや、あいつには俺たちもちょっと困つてゐるんだよ

ブルの上に落とした。

と、じぱりくじてから部長は顔をあげると言つた。

「あいつは俺たち兄弟のなかでも一番年下だから、どうも甘やかされて育つたところであるみたいでね・・・その、なんというか、すぐ子供っぽいところがあるんだ。気に入らない人間がいるとすぐに辛く当つたりしてね・・・再三注意はしているんだが、なかなか効果がなくてね」

池田は部長の言葉に何と言えばいいのかわからなかつたので黙っていた。池田は部長からまわかこんな言葉ができるとは考えてもみなかつた。

「どうだらう

と、部長は池田が黙つていると言葉を続けた。

「会社を辞めるのは考えなおしてもらえないだらうか？きみの仕事ぶりはなかなか熱心なところがあるし、僕としてはできればきみに会社に残つてもらいたいと考えているんだ

・・・もちろん、きみもあいつと一緒に働き辛いだらうから、ちゃんとそれも考えているよ。あいつには来月から九州に行つてもらうつもりだ。今度九州に進出する計画があつてね、あいつにはそつちのプロジェクトに入つてもらつつもりだ」

池田は部長の言葉に頭を振つた。部長の申し出はありがたがつたが、しかし、もう既に池田の決意は固まつていて、今更会社に残るつもりはなかつた。新しい場所で最初からやり直してみたいという気持ちの方が強かつた。

池田がそのことを部長に伝えると、部長はいくらか残念そうな表情はしたものの、最終的には池田の気持ちを尊重して、会社を辞め

「ふじ」とを認めてくれた。

「また機会があつたら東京にも遊びにきてくださいよ」と、中島のとなりに立つている寺岡が微笑んで言つた。池田は寺岡の言葉に曖昧に微笑して頷いた。

「そつちもたまには大阪に遊びにきてや」

と、池田のとなりで泉谷が明るい声で言つた。

「ほんまやで」

池田も泉谷の科白に賛同して言つた。

「もちろん」

池田と泉谷ふたりの言葉に中島は小さく笑つて答えた。

「わたし、大阪のこと愛しますから」

そのうちに、中島たちふりたが乗る予定の新幹線がホームに入ってきた。

「じゃあ、東京でも頑張つてな

と、池田はふたりが乗降口から新幹線に乗り込むと、そう声をかけた。

「何か色々ありがとうございました」

と、中島は乗降口に立つたまま、今にも泣き出しそうな表情で言った。

「池田さんたちに出会えて色々楽しかつたです」「俺も、池田さんたちと出会えて良かったです」

中島のとなりで寺岡が笑顔で言つた。

「こつになるかわからぬけど、絶対結果だすつもりなんで、みと

いてください」

「楽しみにしてるわ」

と、池田は微笑して言った。

やがて、新幹線の発車するアラームがなって、ドアがゆっくりと閉まった。

中島は乗降口に立つたまま、池田たちふたりに向かって手を振った。池田は軽く手をあけで中島に応えた。

動き出した新幹線はすぐに遠くに見えなくなった。池田はあげていた手をゆっくりともとに戻した。

「行つてしまつたな」

と、車両の姿が見えなくなつてしまつと、池田のとなりで泉谷が名残惜しそうに言った。

池田は泉谷の言葉に黙つて頷いた。

それから、池田は中島たちふたりの姿を辿るよつて、新幹線が去つていつたあたりの空間を黙つて見つめた。
空から舞い降りてくる
微かに黄金色の色素を含んだ暖かな日差しが、その空間を穏やかに輝かせていた。池田はそんな眩しい世界を見つめながら、中島たちの未来を思つた。池田は純粹に彼らが東京で成功できるといいなと思つた。そして自分も頑張らつと思つた。少しずつでも、前に向かつて進んでいけるよつて。

思い出したよつて少し冷たい風が吹き抜けいき、それはどうしてか誰かの哀しい歌声のよつてにも聞こえた。

少し歩き疲れたので、池田は駅前のベンチで休憩することにした。まだ面接までは十分に時間がある。

池田の田の前をたくさんの人たちが忙しそうに足早に通り過ぎていく。

ふと空を見上げると、やけに冬特有のどんよりとした冷たい灰色の空が見えた。

もう、中島たちが東京に行つてから約一ヶ月が経過した。

この前池田は久しぶりに中島にメールを送つてみたのだが、中島は東京で元気にやつているらしかった。なんでも今は雑貨屋さんでアルバイトをしているらしい。まだ標準語に馴染めなくてときどき大阪がすじく恋しくなると彼女はメールで書いていたが、彼女は東京での新しい生活をそれなりに楽しんでいるようだった。中島の彼氏も東京で順調に音楽活動をはじめてしているようで、この前いくかレコード会社にデモテープを送つたところらしい。

池田は会社を辞めてから結構たくさんの数の会社の採用試験を受けた。そのうちのいくつからの会社からは比較的良好な返事がもらえていて、今日これから面接に行く会社は、一応社長との最終面接と

「うう」と呟く。いつになつて、無事内定をもらうことができるかどうか池田はいまひとつ自信がなかつたが、とりあえず今は自分なりにベストを尽くせうと思っていた。駄目だったら、またそのとき考えればいい。

池田は空をゆっくりと流れしていく冷たい灰色の雲を見つめながら、ここ半年ばかりの歳月を振り返つてみた。考えみると、この短い期間のあいだにすいぶん色んなことがあつたような気がした。恋人を失い、会社を辞めた。どちらも全然大したことではないかもしれないが、しかし、そのことを思い出すと、池田はふと哀しいような気持ちにもなつた。自分がこれまで信じてきたことは全て無駄だつたのかな、と、池田は心から何かが失われていくように感じた。

空に向けていた視線を足元に落とすと、そこには名前の知らない小さな草の花が咲いていた。歩道の敷石の隙間から雑草が生えていて、その雑草が小さな花を咲かせているのだ。淡い青色の小さな花だった。こんな寒い季節に花を咲かせる草があるんだな、と、池田は思った。それから、池田はふとこの前友人が自分に送つてくれた小説のことを思い出した。

武田洋介から年賀状代わりの手紙が届いたのは、一月のはじめのことだつた。その手紙のなかで武田は自分の近況を伝えてきていた。今自分は実家に戻つて家業を手伝つていること。慣れないことが多くて大変だが、でも、それなりに充実した毎日を送つてていること。

そして、武田は手紙の最後にこう記していた。実は自分は実家に戻つてから再び小説を書くようになったのだ、と。最後に大阪で池

田に会つたあの日、自分はもう小説は書かないと言宣言したものの、やはりどうしても小説に対する未練の気持ちが捨てきれないで、性懲りもなくまた書き始めてしまつたのだ、と、武田は手紙のなかで弁解していた。

その手紙には最近彼が書いたという短い小説も同封されていた。池田は早速その同封されていた小説を読んでみたのだが、その『冬の花』というタイトルの小説は、小説として優れているかどうかはわからないものの、池田の好きなタイプの小説だった。読み終わつたあと、静かで、優しい気持ちになることができる。

物語の主人公は三十代前半の女人の人で、彼女は離婚していて、ひとりの幼い娘がいる。東京に住んでいる彼女は過去の色々なことを忘れて、地方の海辺の小さな町に引越しすることにする。その小さな町には大学時代の古い友達が住んでいて、その友達がこっちに来ないかと彼女のことを誘つてくれたのだ。

やがて海辺の町に引越した彼女は、娘を通して、その土地で様々なかひとたちと出会い、成長していく。そして過去を乗り越えて、前向きに生きようという気持ちに少しづつなつていいく。

物語の最後で、冬にしか咲かない花の種を娘と一緒に植える場面があるので、池田は足元に咲いている名前知らない花を見つめているうちに、武田の書いたその小説のことをふと思い出した。

池田は俯けていた顔を上げて、もう一度空を仰いでみた。いま見

上げた空には分厚い雲がかかっているが、でも、この雲を抜けた向こ側にはきれいな青空が広がっているはずだ、と池田は思った。そう。雲のない、明るい世界がそこには広がっているはずなんだ、と、池田は思った。

今日はこのあと久しぶりに泉谷と会う予定になつてこる。池田が今田会社の最終面接があると伝えたら、泉谷が内定決定の前祝で急に奢つてやると言つて出したのだ。今日は奢つてやると言つたことを後悔させてやるくらい、たくさん飲み食いしてやろうと池田は思つた。池田があまりにもたくさん飲み食いするので、慌てる泉谷の顔が今から田に浮かぶよつと池田は可笑しかつた。

腕時計で時刻を確かめると、もうそろそろ面接の時間だった。池田はそれまで座っていたベンチから立ち上がると、ゆっくりと歩き出した。前に向かつて。

吹きつけてくる風は冷たかったが、不思議とそれはむしろ心地よく感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4772f/>

曇り空の向こう

2010年10月8日14時49分発行